

2002. 1/19

世界は、沖縄は、これでいいの？

— 中村医師に聞くアフガンの現状 —



中村 哲氏



2002年1月19日(土)午後2時～ 沖縄大学

中村哲沖縄講演会

世界は、沖縄は、これでいいの？—中村医師に聞くアフガンの現状—

沖縄県高校生交流集会委員長砂川剛志:「こんにちは、皆さん遠いところから足を運んでくださいますとどうもありがとうございます。僕は、沖縄県高校生交流集会委員長の砂川剛志と申します。中村哲先生の講演会があると聞いて、中村哲講演会開催実行委員会に参加しました。ところで、18・19日の二日間、僕たちの先輩方は夢の実現に向け大きな一歩を踏み出そうとしています。それはセンター試験です。先輩方はこの試験のために一年間並々ならぬ勉強をしてきた事だと思います。今、こうしている僕も、もう少ししたら『受験戦争』の輪の中に入るでしょう。しかしそれは、たまたまこの平和な土地に生まれてきた、運のいい



人間だったからに過ぎないのではないのでしょうか。

9/11以降に起こっているアメリカによるアフガニスタンへの報復攻撃は、アフガニスタンの子ども達から家族や自由はもちろん、勉強する余裕すら奪って行ってしまいました。この二ヶ国間の『報復戦争』は、確かに多くの影響を及ぼしました。ここ沖縄もそのひとつだと思います。爆撃機が、僕たちの頭上を低空非行で絶え間なく飛び交うようになりました。逆説的に言えば、この二カ国の紛争がもたらしたのは悪い事ではなかったと思います。『国際協力』とは何か、たくさんの人々に真剣に考えさせていくいいきっかけになったのかもしれない。国と国との協力とは、つまり自分も他人も共に栄える道を探す事です。この根本的な精神が何よりも大切だと思います。

今日『アフガン17年と私の提言』というテーマでご講演くださる

中村哲先生は、とても安全とは言い切れない国で17年間医療活動をなっておられました。今日はそんな土地での体験談などを聞けるという事で、とても楽しみにしています。中村哲先生、アフガニスタンに比べると遠くはないですけど、わざわざ沖縄まで足を運んでいただいて、本当に有難うございます。」

新崎盛暉沖縄大学教授・同大学学長：「実行委員会の末端に連なった私



に与えられた役割は、なぜ沖縄でこのような集まりをもつのか、その位置づけについて趣旨説明することです。実行委員会から、皆さんにお配りしてあるチラシとかチケットに書いてありますが、今日のタイトルは、『世界は、沖縄は、これでいいの？—中村哲医師に聞くアフガンの現状—』となっています。今日の中心タイトル、柱は中村先生の話を書くということです。にも拘らず、それがサブタイトルになっていて、まず『世界は、沖縄はこれでいいの？』という問いかけが先にあるのは言うまでも

なく、なぜ私たちが今ここでこういう集会を開くか、はっきりさせておく必要があるからです。

ちょっとエピソード的なことを言います。このタイトルは、初めは『世界は、沖縄はこれでいいのか！』となっていたんです。すると第一回目の実行委員会に参加した高校生諸君の中から、この『か！』は知らないという意見が出て、この『か！』が削られたと聞いています。このエピソードは、非常に面白いと思えました。つまり、私たちの世代は、ある意味では^{まともな}臍を決して、『これでいいのか！』と詰問しなければ気がすまないんですが、今の高校生たちの感覚では『これでいいの？』と優しく問い掛けるといって、いわば世代間の感性の差というのを非常に感じて、教えられるところがたくさんあったんです。そんな意味で、四捨五入すると70(才)に近い私たち世代から、高校生までが一緒に実行委員会を作って、活動した意味も少しはあるのかなあと思っています。

私たちはこの9月以降、あちらこちらで報復戦争に反対するという行動を積み重ねてきました。あるときはデモをやり、あるときは集会

をやり、あるときは小さな映画会をやり、あるいは高校生たちの様々なパフォーマンスがあり、いろいろなことが積み重ねられてきました。それは私たちがマスコミで報道されている膨大な情報の背後に何か隠されている、『正義の戦争』の欺瞞性に気づいていたからに他ならないのです。

しかし、この期に及んでも、沖縄では、なお『振興策』と引き換えに新しい基地を建設しようという動きがあります。これはもちろん、日米両政府に押し付けられてのことではありますけれども、ある意味では物質的な豊かさ、『わずかな豊かさ』と引き換えに、基地を受け入れることが一体どういうことなのか、私たちは、はっきり考えておかなければいけない。今日の企画の背後には、私たちが感じている『正義の戦争』の欺瞞について真実を通して私たち自身が確認したいという想いがあります。

私が中村哲さんの文章に初めて接したのは、9月25日の沖縄タイムスの記事です。この文章が非常に印象に残りました。これは、共同通信の配信記事です。ですから、多分琉球新報にも載っていてご覧になった方がいらっしゃるかもしれません。もしご覧になってない方は、この会場の入口外で売っている『医者井戸を掘る』という本にはさまっているチラシに、ほぼ同じような文章があります。そこには、スローガニックな叫びは何一つないけれども、私たちを納得させるものがあります。

これと同じ様な印象を持った文章に、国連職員の子悦さんが9月13日にインターネットで流した文章があります。CNNやBBC、それに私は是非NHKを付け加えるべきだと思っていますが、『いかに戦争を煽り立てているか』ということをお書きになっています。その後も私は、私に送りつけられてくるミニコミ誌の中で中村さんの講演記録を読んでいました。

それらを読んでいくと、マスコミで流されているアフガン報道では私たちが納得できないような動きは、千田さんや中村さんの文章を読んでいくと、実は納得できる。少なくとも、私は理解できたような気になっています。

私たちが今、アフガンについて知ろうとしているのは何のためなのか。それは、新しい基地を作らせるか否かの瀬戸際に立っている私たち自身の責任を自覚するためだと思います。この講演会をきっかけに、パレスチナやアフガンなど私たちから遠く見える世界の現実には実は沖

縄が密接に繋がっていることを自覚して、決して新しい軍事基地を作らせてはいけないと決意し、戦争や軍隊のない世界を作るために一歩でも半歩でも踏み出すきっかけにしたい。私たちは中村さんのお話を聞きながら、そんなことを考えていきたい。私たちがよく見えないことをはっきりさせ、この機会に確認したい。そんな想いで企画しました。そのことを皆さんの前で説明するように実行委員会から言いつかりましたので、とりあえず私から趣旨説明させて頂きました。どうもありがとうございました。」

(会場：拍手)

司 会：「本当はもう少しお話を頂きたかったのですがけれども、私たち(実行委員会)の都合で時間が押しています。新崎先生、この会場を無償で貸して頂きまして本当にありがとうございます。沖縄大学の皆さん、本当にありがとうございました。(会場：拍手) それでは、皆さん、もう中村先生のお顔を見れば帰ってもいいわよと思うほど、熱い思いで、今日お越しになったと思います。早速、中村哲先生のお顔とあのスマイルをお見せ致します(会場：笑)。中村先生、どうぞ。

(中村先生演台に立つ、会場：拍手)

中村先生について、本来なら実行委員会代表の壺岐一郎からご紹介すべきところですが時間もございませんので、私の方から端折ってご紹介致します。中村先生は皆さんご存知のように、九州大学医学部をお出になられまして、1984年からパキスタンのペシャワールで17年間にわたり医療活動をしておられます。それから、アフガニスタンでは1986年からアフガニ難民のためのプロジェクトを立ち上げられまして、先生はペシャワール会の現地代表、ペシャワール会医療サービス委員長でもいらっしゃいます。多くのことを先生について皆さまにご紹介したいと思っておりますけれども、是非ご本をお買い求めになって、先生のことをもっと、アフガンをもっと深く知らせて頂きたいと思っております。中村哲先生にバトンタッチ致します。」

中村哲医師(以下;中村医師):「皆さんこんにちは。(会場、心待ちにした様子で『こんにちは』と返す)私は人前で話すのが苦手でありまして、講演においてに



なった方の中には『本を読んで感激して会いに来たけど、会わなきゃよかった』と。(会場：笑)中には、『いや安心しました、普通の人ですね』と。当たり前です。私は本当に普通の人間でありまして、後ほど映像で紹介できると思いますけれども、私たちの活動というのは実は私1人で行われておるわけではありません。これは全国で現在5,000名から6,000名の会員たちの支えによって成り立っております。あと、現地の人々です。良心的な人々、それがうまく心を合わせてやっておるといいますか、それで活動が続いておるんだと思います。今日はこの会の17年の歩みを紹介することがそのままアフガニスタンのこの17年、過去の問題、アフガニスタンの風土、風俗、現状の紹介になると思います。その後、なるべく皆さん方から多くの質問を頂いて、それに答えるという形で私の話を進めていきたいと思えます。それから先程学長の話にございましたけれども、こういう問題意識で迎えられたのは、おそらく私がお話した日本の講演会の中で初めてです。漠然とした平和、抽象的な平和主義を語るのも悪いことではないですが、はっきり自分の問題として受け止めておられることに対し、私はその通りだと思います。私が言いたかったことを先に言って下さいまして、(学長)ありがとうございました。

(会場：笑)

まさにアフガニスタンは遠いようでありますがけれども、実際その背景で起きていることを見ますと、これは沖縄と言わず、日本全国民の一人一人の将来に直結することなんです。ところが、どっか遠いところ



で起きていることと、本土ではマスコミからも少しずつ興味が消えつつあるというのが現実であります。私たちの話には、政治的なスローガンだとか何も持っておりませんが、私が見たこと、聞いたこと、感じたことをそのままお話しして皆さんのお役に立てたいと思えます。まず、最近の会の活動を綴った映像が入ってきておりますので、それを見て頂きたいと思えます。」

<ペシャワール会「医療と水と食糧を」ビデオ上映>

映像の音声 (ナレーション): 「ペシャワール会は、中村医師を先頭に無医地区と化したカブールに診療所を開設しました。史上最悪の干ばつで飢餓が進行する中、1千個所の水源を確保するプロジェクトも始めました。こうした活動を支え続けてきたのは日本人会員の会費と寄付金でした。

アメリカに対する同時多発テロによって再び騒乱の渦に巻き込まれたアフガニスタン。ペシャワール会は緊急支援として、空爆下、食料をアフガニスタンに運びました。多くの善意を難民にもなれない人々へ届ける。それがペシャワール会の活動です。

パキスタン北西部の町、ペシャワール。アフガニスタンとの国境までわずか50 Kmのこの町に、ペシャワール会ジャパン医療サービス、通称『PMS』の基地病院があります。

朝8時、全職員を集めた朝礼で1日が始まります。院長は中村哲医師。1984年からこの地で診療を続けてきました。パキスタン人、アフガン人、日本人、民族や部族の違いを超え、共に働いています。1日の外来は350人。ベッド数は70。この日はハンセン病を患いながら、長い間医者にかかることができなかった患者の診察です。患者ひとりひとりに合わせて義足も自前で作ります。

中村医師とこの地を結びつけた堤防ティリチ・ミール。1978年、中村医師はティリチ・ミール遠征隊に医師として同行。医療から見放された人々に出会いました。その後、ペシャワールに赴任した中村医師はハンセン病患者の多い山村、無医地区をまわりました。また、戦火をくぐって、ペシャワールに逃れてきたアフガン難民のキャンプでも無料で診察しました。1991年には遂に国境を越え、内戦の続くアフガニスタンの山岳地帯に赴きます。一番困っているのは、攻撃と病に脅えながら暮らす人々だと考えたからです。多くの難民がペシャワール会の活動に共鳴し、中村医師と行動を共にしました。」

(中村医師): 「人がどっと押し寄せる所は行かない。誰かが医療を施すだろうと。ハンセン病の分野は誰もしたがらないからするのであって、山の中の診療にしても、皆押しかけていれば我々は決して行かないです。だから、人の行きたがらないところに行く。人がしたがらないことをする。一つの方針としてあると思う。」

(ナレーション)：「タリバンがまだ実行支配していた2001年8月の首都カブール。この年、この町にペシャワール会が5つの診療所を開設しました。ここでは民族の区別なく全ての人を無料で診療。そのため毎日800人近い患者が訪れます。中村医師は半月に1度の割合でこの地に出向きます。この日、生後3ヶ月の赤ん坊が運ばれてきました。日本でもよくある皮膚炎ですが、極度に皮膚がただれています。」

(中村医師)：「基本的に栄養状態が良くないというのがあります。それから衛生状態が良くない。あの状態でも、水で洗うだけでかなり良くなるんです。しかし今、それがなかなか癒えない状態にあるのは水そのものが欠乏している。こういうところでも(干ばつの)影響が出てきているということもあるでしょうね。」



早目に手を打ってあげば、日本ではこんなもんで死ぬような病気じゃないんですね。」

(字幕)：「すごい熱だ」

(ナレーション)：「急患です。まだ1歳半の子ども。朝、発熱し、みるみる意識が薄らいだと言います。この夏流行したマラリア。時に幼い命を奪います。入院設備がないため、風通しの良い庭に運ばれました。日本の病院ならどこにでもある点滴。それがここでは貴重な特効薬なのです。2時間後、この子は意識を取り戻しました。」

(字幕)：「本当に助かった」「診療所のおかげで安心して暮らせる」「病気になっても心配ないのだから」

(ナレーション)：「この年、アフガニスタンは史上最悪の干ばつにみまわれました。」

(字幕)：「こりゃひどい」「これ取ってよ」「やめて!」「ジャマよ!」

(ナレーション)：「次々に井戸が



涸れた為、かろうじて残った水路に子どもたちが群がり、水を奪い合っていました。このままでは医療活動を続けられないと、ペシャワール会では2000年7月よりアフガニスタン東部の町ジャララバードに事務所を構え、水源確保事業をスタートさせました。

現地スタッフは700人。それを仕切るのは蓮岡修と日本人の青年たちです。彼らは『東部一帯で1千の井戸を掘る』という目標を掲げました。そのためには誰よりも日本人が体を張って働くことが肝心。こうした姿勢が少しずつアフガニスタンの人々のやる気を引き出していったのです。堅い岩盤。2tもある巨石。どんな危険な仕事にも挑みます。ほとんどの井戸は手掘り。深さ60m以上に達することも珍しくはありません。掘り始めてから1月半。』

(字幕)：「水だ」

(ナレーション)：「この地下水は渴水に苦しむ人々の命をつなぐのです。それから1週間後、渴水の村につかの間の潤い。事業開始から1年。確保した井戸の数は600を超えました。

(字幕)：「福岡県福岡市」

(ナレーション)：「雑居ビルが並ぶこの町の一角にペシャワール会の日本事務局があります。毎週水曜日の午後7時ごろ、20人程のボランティアスタッフが集まってきます。活動に共感する人々からの電話、寄付金の整理、礼状などの発送作業、スタッフの活動は全て手弁当。現地の状況が悪化するに連れ、仕事量も膨大なものになっていきます。」

(ボランティアスタッフ・松岡由香里)：「いろいろ寄付を頂いているので、ちゃんと理解して頂ける方がたくさんいらっしゃるというのは心強いです。」

(ナレーション)：「事務局の役割は、現地の正確な情勢を人々に伝えることです。」

(ペシャワール会広報担当・福元満治)：「私たちは今までどおり、要するに現地で何が必要とされているかということ了我々の可能な限りを一実現していく。それをやっていくしかないんだろうと思います。」

(ペシャワール会事務局長・村上優)「現地の情報ってリアルタイムに届くわけじゃないんですね。その温度差は必ずあると思います。ただ、その温度差をいかに埋めるかというのが随分大事なことだと思います。僕らは本当に向こうのこと知っているようで我々すら十分知らない。やっぱり我々はあるのまをを知りたいし、みんなに知って頂きたいと

いう気がしますね。」

(ナレーション)：「ペシャワール会の発足は1983年9月。経常費の95%を現地活動に費やしています。現在5千人の会員をまとめる日本事務局と現地PMSで構成されます。現地PMSは、ペシャワールにある基地病院を拠点にアフガニスタン、パキスタンで活動しています。特にアフガニスタンでは本来の活動目的である医療活動に加え、水供給計画、食糧配布計画も行っています。ペシャワール会の歩みの中で最大の転機となったのは1998年の新病院建設でした。総工費7千万円の全てが日本から寄せられた善意の寄付金。これにより30年先を見据えた自前の病院を持つことができるようになったのです。検査機器の充実。リハビリプログラムの向上。ハンセン病患者は感覚神経が侵され、足裏を傷つけて、切断にまで至ることさえあります。そのため、それぞれの足型に合ったサンダルを作ります。訓練コースも開設。検査助手や看護助手の人材育成にも力を注いでいます。新病院の完成によってPMSは活動範囲を拡大しました。現在は合計10カ所に診療所を開設しています。

2001年10月。ペシャワールにあるスタッフハウスは緊迫した空気に包まれていました。アメリカがとうとうアフガニスタンに空爆を開始したのです。」

(字幕)：(ほやく)「やり始めたな」「ちくしょう！」

(ナレーション)：「ペシャワール会は空爆にさらされ、難民にすらなれず、食糧援助からも見放された人々を救うため、「アフガン命の基金」を募り、小麦粉4500トンをお届けます。これで50万人が飢餓から救われます。」

(中村医師)：「ここに来ればいろんなことに遭遇するのです。皆が善人というわけじゃない、助けられる人も。中には悪いことするやつもある。うそはつく。人は殺す。いろんな中でそんなものも取り外して、やっぱり何かがあるのです。人間らしい共感できるものがある。そんなものによって、また励まされてきたということでしょうかね。」

(ナレーション)：「10月20日からトラックが次々と出発しました。同じ人間として虐げられ苦しんでいる人々を見捨てておくことはできません。多くの善意に支えられながら、私たちは活動を続けていきます。」

・・・ビデオ上映終了

中村医師:「皆さん不思議に思われるかもしれませんが、我々は空爆下でも自由自在に国境を通過できますから、食料計画も、それから水計画も私たちの活動は現在も休みなく続けられております。私4、5日前にアフガニスタンから帰ってきたばかりですが、ジャララバードという本来のアフガン側の事務所に日本人もやっとなることができました。これからさらに農村の再建に向けて本格的な活動が始まろうとしております。

また後でお話しますが、アフガニスタンは未曾有の大干ばつにさらされておまして、今年生きて冬を越せない人がたくさんいます。その中でもカブールという町に集まって来ておる市民の惨状というのは目に余るものがあります。そのうち餓死するであろうと思われる人々には、配給が完了致しました。これも全国各地から寄せられた募金によるものでありまして、その額は5億円を超えました。これによって、ただ食べ物をやるだけではなくて、さらに自分たちで生産できるようにと本格的な活動が4月から始まろうとしております。まず、どうもありがとうございます。次いで、この会の歩み、現地の状態などスライドを交えてお話したいと思います。スライドお願いします。どうぞ。」

(スライド1)

「先に簡単にお話しますので、後ほど何でも結構ですから会場から質問を寄せて頂いて、それに答える形で現地の理解を深めていきたいと思っております。私たちの活動はパキスタンの北部のペシャワールという国境の町を拠点と致しまして、一つの病院を基地病院として、現在10カ所の診療所をアフガニスタン、パキスタンにまたがって運営しております。今年約30万の診療が行われております。現地スタッフで医療スタッフは二百数十名、日本



人のスタッフは5名から6名という構成で進んでおります。』

(スライド2)

「年間約1億円の予算規模で、そのうち約85%が会員達の寄付です。寄せられたお金のうちの95%が現地に届く。皆さん当たり前ではないかと思ってしまうのですが、組織が大きくなればなるほど組織の維持にお金がかかる。固有名詞を言って非難されたので言いませんけれども、国際的に有名な組織で、誰もが信用している団体への募金は半分届けばまだましで、ひどい場合は9割が組織維持に使われるということもあります。こういう状態の中で95%というのは驚異的な数字です。1億円というのは他の国連や政府の援助に比べると小さいようですけれども、その数十倍の威力がある。決して多くない数千名の日本人の良心によって支えられておるといことが、私たちには非常に愉快に思うことでございます。」

(スライド3)

「なかなか日本の方々に分かってもらえない現地の実情をいくつか掻い摘んでお話をします。現地はペシャワールという所で北緯33度。大体西日本の緯度にあたりますけれども、降雨量は日本の約200分の1程度です。ごつごつした岩石砂漠、中央アジアの一部の砂漠地帯です。ここで彼らはどうやって食っているかと言いますと、アフガニスタンの全人口がいろいろ説があって誰も良く知りませんが、2千万人前後と言われております。その9割以上が農民、お百姓さんですね。それから数%が遊牧民。大体正しい数字だと思います。こんな乾燥地帯でどうやって農業が成り立つか。日差しが強いですから、山から溶け出してくる雪解け水によって川沿いが潤っており、豊かな実りをもたらしてくれる。アフガニスタン全体が農業国家と言えると思います。また、夏は暑くて冬は寒い。夏の暑い時で、私がいた時で一番のレコードは52℃というのがありました。極端な所なんです。日差しが強いし、陰も強い。光と陰である。キザなことを言いますが、実際そうです。」

(スライド4)

「アフガニスタンの面積は日本の約1.6倍。しかし、そのうち山が占めるのはおそらく8割から9割以上。言わば日本と似た山国であり

まして、山も規模が違う。パミール高原を中心として東にのびるヒマラヤ山脈に対して、西側にのびるカラコルム・ヒンズークッシュ山脈というのがありますが、これがアフガニスタンのど真中にでーんと居座っていて国土の大半を占めるといふ山の国なんです。それも並みの大きさではなく、日本列島がすっぽり入るくらい。4000m、5000mという山は普通でありまして、中には6000m、7000mという山もあります。

私たちの活動は、山間の谷を蟻が這うように歩いて診療圏を拡大しておる状態であります。私たちが飛行機に乗ってぱっとどこかに行ったり、自動車に乗ってあそこからあそこまで、空港から大学まで25分という世界とはちょっと違う。私たちの一番遠い診療所には、片道歩いて1週間という所がざらにあります。馬に乗ったり、歩いたりして行くわけですから、現地では時間感覚と距離感覚がまるで日本とは違う。

普通距離を表すのに我々何kmだとか何mileだとか言いますが、現地では日にちを使うんです。『ここから歩いてどれくらいですか』と。『普通の人なら3日。弱い人なら4日。強い人なら2日半。』こういう言い方なんです。歩いて歩いて『すぐそこです』と言って、歩いて歩いて着かないんで、『一体いつごろ着くのか』と、『明日中には着くんじゃなんですか』というような所なのです。だから要するに何をしても時間がかかる所であるということです。

今度も私は一連の報道を見ていまして、米国側がタリバンというのは交渉の引き延ばしをやっていると、国民会議が開けないというのはおかしいと言いますが、とんでもない。日本で数日でできることは現地では数ヶ月かかるというのが普通でありまして、とてもそんな世界とは違うんです。しかもこの雪はもう一つ意味がありまして、アフガニスタンの源です。生きる源というのは実はこの雪であります。アフガニスタンには『金はなくても生きていけるけども、雪がなくて



は生きていけない』という諺がありますけれども、その通りです。

降り積もるこの雪が夏に溶け出しまして、そしてヒンズークッシュの山の中あるいは山の周囲に2千万人の人間を養い、動物を養い、植物を養い、いろんな人々、動物がこれの恵みを受けてきたわけです。私たちが危機感を持つのはこの雪が今消えつつあるという状態であり、これは地球温暖化と非常に密接な関係があり、今度の大干ばつというのはある意味では戦争より怖いと私は思っています。」

(スライド5)

「もう一つ、日本でなかなか分からないのは現地の政治の在り方。よくタリバン政権や北部同盟だとか言いますが、現実はそのゲームみたいなものじゃない。アフガニスタンというのは一つの珊瑚の塊に例えることができる。1匹1匹の珊瑚の虫は生きていても、1部が崩れても他の珊瑚は生きておるという状態です。言うなれば地域地域が一つの1単位として自給自足の生活を行っておりまして、その中心にあるのがこのイスラム教の寺院。中世のキリスト教の教会に相当する所で、おそらく99%はイスラム教徒。この地域を総括するのがイスラム寺院と並んで「ジルガ」。「長老会」というふうに訳しますが、この長老会が権威を持っておりまして、住民たちはそれぞれ自分で自分の利益に基づいて決定する。

例えばソ連軍が入ってくる、アメリカ軍が入ってくる、タリバン軍が入ってくる、北部同盟が入ってくるという時にどうするかと。各地域がそれぞれ決定するわけです。これと戦うべきか、一応従うか、従ったふりをして後で立ち上がるかということを経地域の長老会が決定する。それで全体が成り立って、アフガニスタンという同一性が成り立っておるといことがなかなか皆には分かりにくいと思います。法律らしきものは表向きありますけれども、実際アフガニスタンを束ねるのは不文律。アフガニスタン共通の掟でありまして、これはもう何百年か何千年か知りませんが、昔からこういう不文律を守ってきたという社会です。だから、その辺がなかなか日本人には分かりにくい。ヨーロッパ人にはますます分かりにくくて、つい文化的な誤解が生じやすいということです。

若い方覚えていらっしやらないでしょうけれども、昔消費税というのはなかったのです。消費税を導入する時に日本じゅうが猛反対した。ところが、いったん国会を通過してしまいますと日本みたいに1億2千

万人が全部それを守るといふ社会とちょっと違う。そんなことをすると現地では反乱が起きるんです。」

(スライド6)

「これは決して映画のロケーションではなくて、実際に現地で見られる普通の光景であります。農村に行きますといまだに1千年前と同じようにらくだの隊商が行き来しており、シルクロードの時代とあんまり変わ



らないのです。私たちはこういうまるで考えの違った人々が一体何を考えているのか理解する。どういうことで喜ぶのか、何が嬉しいのか、何が悲しいのか、どういうことで怒るのか、そんなことが分からないと医療行為というのはできませんので、この理解に随分時間がかかります。」

(スライド7)

「さらに一般的なことでありますけれども、『貧しい者はますます貧しくなっていく、豊かな者はますます豊かになっていく』という構図が現地では非常にはっきりしておる。例えば、難民問題に関して、あそこでアメリカが空爆を始めると難民がばっと押し出されてくる。そこで、難民支援のために日本から軍隊を派遣するという議論が本土では一時にぎわっておりましたが、『それはおかしい!』と私がはっきり言ったのは難民にもなれない人たちがほとんどだからです。

後でお話しますが、現在アフガニスタンの各都市は干ばつで逃れてきた元農民たちで溢れておまして、こういう人たちは現金収入がない。アフガニスタンの大半の所は、山奥に行きますと自給自足。それは健全なことではありますが、現金収入がないのでまだ物々交換の世界です。こういう人たちが逃げてきても、難民になれない。歩いて行

くと大変なことになるのです。難民になるにもバス代がいる、国境を通過する時に賄賂がいる。とてもそんなお金は持ってないと言う人が大半でありまして、こういう人たちは出て来ないんです。

難民にもなれる人はまだましなんだということを言ったけれども、誰も信じてくれなかったということがあります。医者の方から言いますと、事実は数百円どころか、数十円のお金がなくて死んでいく人が数知れないかと思えますと、一方で、わずかな病気でロンドンやニューヨーク、東京に簡単に出て来られる人もいます。これも現地に行って得たこの一つの認識というのは、『医療は進歩すればする程、お金持ちに奉仕するような医療にしかねれない』と思われまます。日本流を現地に持っていきますと、速やかに貧乏人は死に、お金持ちだけが助かるということになっていく。私たちとしては、いかに少ないお金で、いかに多くの人々に、いかに効果的に恩恵を及ぼすかということに腐心せざるを得ない。そんな世界でございます。

(スライド8)

「17年前、私たちの初めの使命は当時現地に2400名いたハンセン病患者、昔は『らい病』と言いましたけれども、らい患者の治療センターを充実するということが始まりました。今日は詳しく申しませんが、ハンセン病は現地では増えに増えておりまして、現在数年前に7000人を突破いたしまして、最終的には数万名に達するというのはまず間違いのない。むしろ病人は増えておると言うのが現実であります。ともかく17年前当時、2千数百名の患者に対して治療センターを、ということでした。

治療センターと言うのはどういうところかと言いますと、この写真1枚で説明できる。この写真に載っておるのが当時ありました全ての医療器具でございます。ベッド数がわずか16床、この汚いベッドに眠れるだけという状態でありました。壊れた聴診器が1本。脚の壊れたトローリが1本。数本のねじれたピンセット。注射器はこのディスプレイを何度も洗って使うという状態でありました。受講者の中には医療関係者もおられると思えます。当時どうやってこのガーゼを消毒しておったか。金属のボウルの中にガーゼを詰め込みまして、オープンの中に入れる。煙が出始めた頃、ぱっと出す。狐色に焦げていると消毒済み。(会場：笑) 白いやつは未消毒と。こういう中で始まったわけございまして、よく医療は心が重要だとか、物や金ではない

んだとか言いますけれども、少なくともここに関しては物量も無視できないということで、にわかにはペシャワール会の活動は活発化致しまして、現在に至っておるわけでございます。」

(スライド9)

「今ではハンセン病というのはいろんな局面の治療がありまして、整形外科、形成外科、それから皮膚科、神経病学、眼科学と様々な分野が統合されて一つのフィールドを形成しております。信じがたいことに現在ではアフガニスタン全体、それからパキスタン北部でまともにハンセン病の診療ができるというのはうちの病院だけです。実際ハンセン病の診療は病院活動の約1割程度で、現在では9割ぐらいが一般の患者になっております。これは7千名のハンセン病患者の強力な後ろ盾として安心感を与えておるわけでございます。こういう写真だけ見せますと、確かに医療活動しているなということが分かりますけれども、私たちのエネルギーの大部分は一見医療と関係のないことに注がれてきたわけでございます。」

(スライド10)

「いかに現地の文化、風習を理解するか。例をあげますと、現地では女性が被り物をする習慣がある。『ブルカ』と言いまして、地域によってはすっぽりと網目のものをかぶって出てくる。女性にとってはうっとしい社会でございますけれども、医療関係者にとってもそうです。



例えば、ハンセン病の初期症状と言うのは、普通皮膚に出てくるのです。男性の場合なら、シャツを脱がしたりして、体中の皮膚をチェックして、赤い斑点を発見して治療すれば完全に治る。ところが女性の場合はそんなことをすると大変なことになります。女性に対するいたずら。これは殺傷沙汰になるというのが普通でございます。婦女暴行に至っては死罪。それもお巡りさんが出てくるわけじゃない、住民たちが自分でとっ捕まえて、石で投げて殺すというのが慣習でありまし

て、2千年くらいはおそらく変わっていない。

こんなこと言っているのかどうか分かりませんが、沖縄でもいろんな女性に対する米兵によるいたづらが有ったそうですが、現地でそんなことをすると米兵は殺されておるとい世界でございます。それくらい厳しいものでございますから、私たちも気を遣う。聴診器も服の上からあてるとい状態でありまして、これだけは外人部隊に頼らざるを得ないといこと日本人のワーカーを現地に送り込んだわけでございます。

私が見て良くないなという点は、一般に外国人、特に欧米人は現地のこいう慣習や文化、風習の違いを善悪だとか、優劣のカテゴリーで見ると。そのためにこんなことをする所は野蛮な所であると、こんな風習は文明化してつぶしてしまえとすぐこいう論調になるわけです。そんな批判も、人権活動家としてのもの見方といのは大事だろうけれども、一般に外国人といのはこいうふう騒いですぐ国に帰ってしまう。

私たちに言わせると、彼らはそれでニューヨークやロンドンに帰ると、あるいは国際会議でヒーローになりますけれども、残ったこの患者さんをどうしてくれるんだとりたいんです。彼らが全部連れて行くならよしいと。ただし、批判だけして帰っていくといことでは何にもならないと。私たちとしては文化や風習の違いについては一切優劣や善悪のカテゴリーで見ないとい態度を貫いています。人間は實際いろんな制約の中に暮らしておるわけで、現地は現地なりのいろんな制約があって、女性もこの中であってこの中で最大の幸せな状態は何であるかといのを問うて、対応するのが医療関係者の役目でありまして、決して文化の批判ではないとい態度を貫いてきました。]

(スライド11)

「現在まで述べ20名前後の女性ワーカー、看護婦さん、作業療法士、それからリハビリの方々現地に赴き、女性の罹患発見率が向上する。患者に対する治療サービスが向上するので、これも私たちがしてきたいい仕事の一つではなかったかと思ひます。現地に女医さんや看護婦さんがいないわけではない。しかし普通医師・看護婦になるといのは非常に身分の高い人でありまして、気位が高い。だから我々から言わせると、腕のわりに気位が高いばかりで役にたたない、使いもんにならない。彼女らが實際現地に赴きまして、本当はこいう精神でや

らなくちゃいけないんだと示す。『下賤の者の世話はできない』と言う看護婦さんまでおられます。そんなことでは医療というのは成り立たない。医療人としての心構えを徹底的に叩き込むということでも、現地に大きな役割を果たしたと思います。』

(スライド12)

「それからアフガン戦争。1978年の12月に当時世界最強と言われておりましたソ連軍の大部隊10万人が、時のアフガニスタンの共産政権を擁護するという名目で大挙して侵入致しました。なんと今に至るまでアフガニスタンはその内戦の余韻を引きずって、混乱状態にあるわけでありまして。実際にソ連が引き上げていったのは1989年の2月でありましたが、このわずか約9年間のアフガン戦争によって死亡した者は200万人。難民となって国外に流失した者は約600万人。そのうち約半分の300万人がアフガニスタンからパキスタン側、それも国境沿いのペシャワール周辺に流入してきまして、私が赴いた当時は最も内戦が激しい悲惨な時期でございました。実際にアフガン人はペシャワールをアフガニスタンの1部と考えておるぐらい近いですから、自然と私たちもこれに医療の立場から呑みこまれていったわけでございます。』

(スライド13)

「だからと言って、当時のこのこと中に入っていける状態ではなかった。農村が主な戦場になっておりまして、私たちとしては難民キャンプを中心に活動をせざるを得なかった。』

(スライド14)

「はじめは細々と難民キャンプで活動を続けておりましたが、1986年になりまして、ペシャワール会の方針の大転換を致しました。一つはハンセン病だけを診る診療というのでは現地にそぐわない。ハンセン病が多いところは同時に他のうつる病気、マラリア、腸チフス、結核、デング熱、アメーバ赤痢、とありとあらゆる感染症の巣窟である場合が多い。かたやマラリアで死にかけている人を『あなたはハンセン病でないから診ない』というわけにはいかない。やはり、一緒に診てあげなくちゃいけない。

感染症の多い所、ハンセン病の多い所は同時に医療機関の全くない

貧しい農村地帯が多いのでございます。ハンセン病の仕事というのは非常に長くかかりますから、私たちは先を見越して、内戦が下火になった暁にはアフガニスタン国内に無医地区と言いますか、医療機関のない地区に診療所を建てて、同時にハンセン病の患者の世話もしようという戦略に切り替えたわけでございます。これによってペシャワール会はハンセン病の診療だけではなく、アフガニスタンの農村、正確に言いますと山村、無医地区のモデル診療体制の建設も一つの大きな目標となっていたわけでございます。そこで細々と難民キャンプで診療活動を続けながら、若者をトレーニングし、そして診療所開設予定地域での調査を開始したわけでございます。」

(スライド15)

「当時はアメリカ軍ではなくてソ連軍がしばしば爆撃に来ておりました。別にどこかやられたからと言ってお巡りさんが出てくる世界でもないし、軍隊が出てくる世界でもない。住民のことは住民が自分で決め、住民で守るという世界でありまして、村では青年団・少年団の人々が銃を取ってそれに抵抗する。お年寄り・子ども・女性など弱い立場の人は難民キャンプに送って、自分たちは戦う。こういう世界がありますが、この中で私たちは住民と接触が始まったわけでございます。」

(スライド16)

「アフガニスタンとパキスタンの国境と言うのは、全長約2400キロメートル。表向きは国境閉鎖というふうに報道されますけれども、ざるの目です。私は頭は弱いですが足だけは強いので、山越えをすれば簡単にどこでも越えられます。だから難民が何名出て来ただとか、何名帰ったとか、これは表通りだけの話であります。極端な例になりますと、国境の門の所はお巡りさんだとか軍隊が出てかためて厳めしい顔つきでムチで叩いて追い返したりしていますけれども、それから20、30m向こうに行きますと自由に出入りしている(会場:笑)という光景も普通に見られるのです。その辺が映像によるニュースの恐ろしさでありまして、外国人はそれを見て確かに閉鎖されていると、ムチで皆叩かれて来られないと思っていますが、向こうでは日本円にして100円か200円出せばお巡りさんが通してくれるという世界でありまして、私たちも内戦が厳しい時期は山越えをして、山

から山を、谷から谷を歩きながら調査を続けておりました。』

(スライド17)

「アフガニスタンの大半は歩いて行かなければいけない山の中にありまして、どこに行っても友好的です。このヌーリスタンというアフガニスタンでは最も高い所に住んでいる民族の一つの村です。ここに行った時に『ドクターはフランス人ですか』と聞かれたんです。(会場; 笑) 今まで『中国人ですか』とも『台湾人ですか』とも聞かれたことはありますけれども、フランス人(会場; 笑)というのは初めてでした。後で分かりましたが、外国人を見るのが初めてだったのです。(会場; 笑) いくら便所で鏡を見ても私はそんなに顔立ちがいいとは思えない。(会場; 笑) 聞くとそんなことでありまして、フランス人を見たことがなかった。(会場; 笑)

『日本人です』と言うと、ころっと態度が変わるんです。どうして日本人がもてるのか私はよく分かりませんが、まず彼らが日本について連想するのが日露戦争、それからヒロシマ、ナガサキ。この3つはどこに行っても皆知っているのです。どんな学問のない人でも知っている。どんな山奥でも知っている。このために非常に対日感情がいい。日本国籍を持っているがために命拾いをしただとか、仕事がうまくいったとかいうことは数限りなくあったというのが現実であります。もっとも、日本に対する正確な知識はありません。お金を貯めている青年がおりまして、『この山の中で金いらさないじゃないか』と言うと、『今度日本に行きたいんだ』と、『歩いて何日かかりますか』(会場; 笑) そんな世界です。

最近では私自身も日本国籍を持つ者として胸が痛みますけれども、『日本はアメリカの何番目の州ですか』と。(会場; 笑) 最近の外交政策を見ていると、そんな誤解がうまれても無理もないなと思えますけれども、日本人そのものに対する親日感というのは並々ならぬものがあります。』

(スライド18)

「ソ連軍が撤退し始めた約12年前、ソ連がつぶれた、そしたら難民が帰るということで今以上に国際社会は大騒ぎしまして、約200億ドルのお金が使われました。今からアフガニスタンの復興が始まるということで、世界中からNGOから国連、各国政府とよって集って援

助合戦が始まりましたけれども、残念なことにこれによって帰った難民は1人もいなかったというのが現実であります。

1991年、湾岸戦争がはじまると、各国のNGO、政府機関、国連はくもの子を散らすように逃げてしまった。私もよく分かりませんが、おそらくヨーロッパの人々・アメリカの人々というのはイスラム教徒に対する何かしら本能的な恐怖感と偏見を持っておりまして、イラクは遠いのに湾岸戦争がはじまると同時にくもの子を散らすように見事に逃げ足が早かった。それもアジア系の人々を残留部隊にして逃げて行くということで、日本人・韓国人・台湾人・フィリピン人等が後に残って後始末をするという状態でありました。これによって難民帰還計画、アフガン復興援助というのは200億ドルを何の目的もなく使い果たして終わったわけでございます。

その後、ソ連が倒れ、共産政権が倒れ、各地域に散らばっておりました政治党派がカーブルに集まってくる。『カーブルを取る者はアフガニスタンを取る』というのが現地の一般的な通念であります。そのため逆に戦場が農村部から都市部に移ってくる。カーブルは荒廃致しますけれども、農村部は平和な光景がひろがっているという実情を難民たちは非常に正確に読んでおりまして、まるで国際援助をあざうかのように、国際援助隊が引き上げてまもなく自分たちで怒とうのように帰り始めたわけです。私は今でも忘れられませんけれども、1992年の5月から92年の12月、わずか7ヶ月間の間にパシャワール周辺にいた300万人の難民のうち200万人が誰の力も借りずに独力で帰っていったという事実がございました。」

(スライド19)

「ところが農民たちは帰っても家の修理から、荒れ放題の畑をまた耕すことからはじめなくちゃいけないということでした。」

(スライド20)

「私たちとしては、難民を迎えうつ形でそれまで調査が完了しておった地域で、医療の側から彼らが



安心して農作業ができる、農村の復興に励めるように次々と診療所を開設していきました。山村東部の山岳地域に現在ございます3つの診療所は、こうやって開かれていったわけでございます。」

(スライド21)

「まだまだ自動車で行ける所は上の上です。私たちとしては自動車も行けないような地域に現在も尚、診療圏を拡大しつつあります。口の悪い外国人は「あれは中村が元登山家で山好きだったから上に登ってるんだ」と言います。とんでもない。大体こんな文句を言う人たちは大抵何もしていない人たちですから、おまえたちが行かないから我々が行っているのであって、私たちの方針は誰もがわっと行く話題性がある所にはとびつかない。誰かがやるだろうと。それよりも話題性はないが、ニーズはある所で我々ががんばるんだというのが一つの方針と言えば方針です。」

(スライド22)

「これは診療所近くの部落で、アフガニスタンのヌーリスタンというところですよ。前は自動車の終点から歩いて3日かかっておりました。こういう所で国際会議なんかに来て、アフガニスタンにおける医療問題だとかこうしたらいい、ああしたらいいというのを聞けば聞くほど虚しいです。私たちとしては、今だからと言って何かこうしたらいいという確信みたいなものがあるわけではありませんけれども、少なくとも医療に関してはそうヤワなところではない。細々と診療を続けながら、ここに住む人たちに最もよいものは何なのか、一緒に探っている段階だと言えらると思います。」

(スライド23)

「そうこうするうちに15年が経ちました。ハンセン病の根絶なんて簡単に言うけれども、日本だって『らい予防法』ができたりにして1世紀近くかかっているのです。これは先が長いと、こんなところで何世紀もかかるだろうと、15年は偵察期間と見て、今後本格的な活動を開始すべきだということで15年1期が完了。つぎ第2期を仮に30年と定めまして、3年前に病院を自分たちの手で作りました。その総工費7千万円。これも全て会員たちの手によるものであります。ペシャワール会が徹底した現地主義と言われるのは、日本では任意団

体でありますけれども、現地では福祉法人として定着をするという戦略をとりまして、現在ではパキスタンに登録された正式の社会福祉法人として認められております。こうやって次の30年に備えるということ。30年というのは何も根拠があって言ったわけではなくて、私は30年しますと86歳になりますので、それまでにはボケるか死ぬかどっちかであろうと。それくらいもつんじゃないかと。その間に誰か次の人が出てくるだろうということで30という数字を決めたわけです。半永久的に活動するというわけでございます。]

(スライド24)

「やっと復興が始まったなと言う時に、本当にアフガニスタンは不運な国です。やっとタリバン政権が出現して、やっと平和な農村生活が皆営まれるようになったところにこの大干ばつ。干ばつについてはほとんど日本に知らされず、全世界で騒がれませんでしたけれども、これは大いに騒ぐべき事態であった。2000年5月のWHOの発表によりますと、アフガニスタンを中心に中央アジア全域、ユーラシアのど真ん中、中央アジア諸国それから中国西北部、インド北部、それからイラン、イラク北部で大干ばつが進行していて、6000万人が被災した。その中で被災の激烈なのはアフガニスタンで、おそらく国民の半分以上に相当するであろうと思われる1200万人が被災して、そのうち飢餓線上にあるものが約400万人。餓死線上にあるもの、つまり放っておくと死ぬということです。餓死線上にあるものが100万人という数字を発表したのが約1年半前。ところがこのことは日本にも伝えられなかったわけです。」



(スライド25)

「これはアフガニスタン最大級のカブール川ですけれども、普通の

ら溺れたらもう死体も上がらないという所ですが、歩いて渡れるぐらい干上がっている。山の雪が少しずつ消えてきているのです。」

(スライド26)

「そのため診療所の周りでは、次々と赤痢で子どもたちが死んでいく。1年半前、うちの診療所も人が増えたかなと、評判が良くなったかなと思ったら決してそうではなくて、診ると若いお母さんたちが子どもを抱えた姿が多くなった。その時初めて分かったわけですが、清潔な飲料水がない。食べ物がなくても人間は何週間も生きられますけれども、水がないことには24時間生きられない。汚い水でもつい飲むのです。そのために赤痢になりやすい。子どもたちを中心にパタパタと死んでいく。何もお腹が減ってばったりと生き倒れるように倒れてしまうという餓死はほとんどない。末期は体が痩せ細って、そして抵抗力がなくなって簡単な病気で命を落としていく。WHOが1年半前に警告を発した、『100万人が今から死ぬぞ!』という予言が決して誇張ではなかったと私は思います。この1年半くらいで軽く100万の人は命を落としたはずだと思います。」

(スライド27)

「まずは食べ物が摂れない、不作であるという段階では皆村にいて残りの蓄えを食って命をつなぐことができます。しかし、飲み水までなくなってくる、家畜が死ぬという段階になりますと、農民たちは次々と村を捨てまして廃村がひろがっていったわけでございます。」

(スライド28)

「普通親戚の所に身を寄せますけれども、さらに親戚もそれでは食わせられませんので、パキスタンに『出稼ぎ難民』として出て行く人が1昨年から次第に増えてきました。」

(スライド29)

「医者がこんなこと言っちゃいけませんけれども、病気どころではない、まず生きて村に留まってくれということで、村人を総動員致しまして清潔な飲料水を得るために大規模な活動を開始したわけでございます。これが2000年の7月の話でした。」

(スライド30)

「ジャララバードという東では最も大きな都市に『ジャララバード水対策事務所』を置きまして現在まで600ヶ所。12月25日の報告では680ヶ所。そのうち560ヶ所で水を得ておりまして、これですなごまとめられておる難民寸前の者が30万人と大きな仕事になりました。」

(スライド31)

「これは地雷であります、このごろ案外地雷の事故は少ない。この10年の間に皆どこが危ないというのは熟知しております。さらに畑とか必要な所は山羊を歩かせたりしてそれを爆発させて自分たちで撤去しています。地雷はボカンボカン処理するものじゃなくて、火薬は性能がいいですから、掻き出してダイナマイトの発破をかけるのに私たちは利用致しました。井戸を掘る時に普通大きな石の処理というのは問題になりますが、これにドリルで穴を開けまして中に火薬を詰めて、そして爆発させれば大抵割れないのはなかった。私たちの職員の半分以上は元ゲリラでしたので(会場;笑)爆発物の取り扱いには慣れています。作業員600名のうち、必ず誰か専門家があります。彼らが大活躍して、地雷も平和利用されました。」

(スライド32)

「水が出ると、国や郷里を離れなくてすみますから大喜びです。こうやって皆の喜びと笑顔に支えられながら、私たちも仕事を続けられてきたのでございます。」

(スライド33)

「これは診療所の周りのドライロールという所ですが、水田の跡です。ここは昔米が豊かに実っていた所ですが、砂漠化致しまして廃村になった。1万数千名の村民がベシャワールやジャララバード等の大きな町に逃げて行くという状態でありました。これが2000年の9月15日。私の誕生日でしたからよく覚えております。これは私が撮った写真です。この地域では『カレーズ』という伝統的な水路があります。簡単に言うと、地下水路を導く灌漑用水です。その復旧も手がけまして、39ヶ所で作業をしてうち30ヶ所で水を出しました。次の写真は翌年の2月。ちょうど今から1年ぐらい前ですか、5ヵ月

後の写真です。」

(スライド34)

「これは同じ地域です。伝統的な技術というのは偉大なものがありまして、これによって水田はできませんでしたが、乾燥に強い小麦やとうもろこしが実り、村人が自給自足できるようになりました。1万数千名の難民が戻ってくるという嘘みtainな本当の話がありました。私たちとしてはさらにこういう活動を拡大していきたいと思っております。」

(スライド35)

「私たちとしては、『こんな大被害、大惨事が世界的な話題にならないがはずがない。そのうち世界的な援助がアフガニスタンに押し寄せてくるであろう。それまでがんばっておればいい。』と思っておりましたら、やってきたのは援助ではなくて国連制裁であった。去年の1月、国連制裁が発動されまして、それも100万人が既に死につつあるというのに食べ物まで制裁しようとした。この中でアフガニスタンは急速に孤立化を深めていったわけでございます。私たちとしては農村地帯が主な活動地帯でありましたけれども、この時ばかりは百数十万人もいるアフガニスタンの首都が国内の難民キャンプに等しい状態となりまして、しかも外国団体が次々と撤退していくという中で、『誰もやらなきゃ我々が行こう』ということで診療所を開設したのが去年の3月。これは現在も継続しております。」

(スライド36)

「去年の10月になりまして、今度は爆弾の雨まで降ってきた。踏んだり蹴ったりの状態でありまして、我々としては国際社会の動きに逆らうように『おまえが爆弾を降らすなら、我々は食べ物を贈る』と、これに対抗したわけでございます。」

(スライド37)

「皆さんの募金の賜物でありますけれども、これによって餓死に直面する人々の所に確実に食料が届けられている。食料配給チームは今も活動しておりますけれども、タリバンが撤退する直前まで身の危険を感じながら、空爆下を困った人々に食料を届けておりました。」

(スライド38)

『なぜあんな所で17年もやれたんですか』とよく聞かれますけれども、自分でも良く分からない。アフガニスタンというのは退屈しない国でありまして、次々といろんなことが起きてくれます。何か一生懸命取り組んでいるうちに、やっと何か落ち着きかけると、何か出てくる。私は決して反米的な人間ではありませんけれども、今度ばかりはアメリカ人を恨みたかった。『この忙しい時に戦争どころじゃない』と言いたかった。そこで17年間振り返ってみますと、あたかも私たちが現地の困った人のために何かしてやったという印象を持ちがちですけれども、実は逆に受けたものの方が案外多いのではないかと思います。

例えば、今度日本のある人々から『なるべく募金の集まりそうな子どもの写真を撮ってきてくれ』と言われて、撮ろうとしましたがなかなかそんな顔がない。どこへ行ってもニコニコしている。この子らが別に豊かとか満ち足りていると言うわけではなくて、明日病気で死ぬかもしれないのです。それでも明るい。それは一体何なのかと。そうやって日本に帰って来てみますと、日本人は暗い顔している。(会場; 笑)『難民は結構明るかったですよ』と言いますと、『ああそうですか。あの哀れな子どもはどうなりましたか』と。確かに哀れではありますけれども、私たちはそんなことではないんだと思います。この活動を通してつくづく思いますことは、『人間は持てば持つほど顔が暗くなっていく』。金ができるほど、物ができるほど、地位ができるほど、あるいは信念に固まれば固まるほど何か暗くなっていく。それを守ろうとするのでしょうか。その挙げ句が人の国まで出かけて行って爆弾を落とさなくちゃいけない。

こういう図柄を見ておきますと、本当に人間が最後まで守らなくてはいけないもの、あるいは守らなくてもいいもの、捨てなくてはいけないもの、捨ててはならないもの、というのが微妙ではありますが何かのヒントを得たような気がするわけでございます。アフガニスタンを見ることは私たちの足元を見ることであると私は今でも思いながら、『助けることは助かること』なんだということでこれからも活動を続けていきたいと思っております。話が長くなりましたが、また後ほど質問を受け付けながら話を進めていきたいと思っております。どうもご清聴ありがとうございました。』

(会場：大拍手)

司会：「中村先生、本当にありがとうございました。『助けることは助かること』と皆さんも身に染みてお感じのことと思います。時間が押しておりますけれども、是非皆さんにたくさんのカンパをお願い致します。どこかに寄付すると何割かは事務経費にいきますけれども、ペシヤワール会の方は先ほどの写真の方々へそのまま届くと思います。これからカンパ袋を回しますのでよろしくお願い致します。それからご質問は多くの方に頂きたいと思いますので、簡潔にお願いします。用紙が挟み込んでありますので、ご感想を是非書いて1階でお出し下さい。ご質問だけ受け付けたいと思います。マイクを持った方が走って参りますので、お手を上げて下さいますか。はっきり上げて下さい。奥の男性の方お願い致します。」



男性A：「テロ対策法についてどう思いますか。」

中村医師：「日本のテロ対策法はピンぼけ、的外れという気がします。テロというのは、まともに政治的な意見が言えずにやむを得ない手段で行う押さえつけられた人々が多いのです。だから私はテロ対策というのは、テロの根っこを絶つべきだと思います。まずはどうして彼らがあんなテロ活動をするのか考えるべきです。物理的に防止する立場から言いますと、これはお巡りさんの仕事であって、兵隊さんの仕事じゃない。片側で機密費用を使う。機密費用というのは人知れず実際情報を集めるために使われるお金のことで、これで競馬馬を飼ったり、女性を囲ったりしておいて、一方では兵隊を出すというのはテロ対策法としてはピンぼけも甚だしいと思います。私だったらもうちょっと情報網を強化致しまして、お巡りさんの仕事としてきちんと犯人らしき人をマークします。これがテロ対策であるべきなのに、テロ対策法というのはどうもピンぼけであるというのが私の実感でございます。国会でやじを飛ばした与党の議員もおりましたが、テロ対策に自衛隊派遣と言うのは有害無益。何にもならない。むしろ行くことによって何で兵隊さんがこんなところにいるんだと、かえって敵意を持つのが実態ではないかと思っております。以上でよろしいですか。」

司会：「次の方お願いします。」

男性B：「〇と申します。タリバンについての先生の率直なご感想をお聞かせ下さい。」

中村医師：「はい。とてもいい質問だと思います。さっきのテロ対策法、それから今度の爆撃も、全体が正義の味方で『無限の正義の米国対、悪の権化のタリバン』という構図の中で全てが描かれる。これに対して私はマスコミの方に一言申し上げたいけれども本当に実態を見た上での姿だったのか。タリバンについていろいろ取り立たされておりますけれども、私が見たタリバンというのは、ソ連軍撤退後の大混乱の状態を收拾して秩序を回復したひとつの秩序ある政権だったと思います。ただ欠点は田舎の慣習法をそのまま都市に押し付けたことで、主に都市の上流階級の反感をかっただというのが現実であります。私はあそこでいろんな権力の変遷を見てきましたけれども、タリバンという権力は最も清潔な感じがしました。

これは日本人全体がタリバンは悪の塊のように思っていますので皆さんの認識と違うと思えますけれども、決してそうではない。実際にあのソ連軍10万をもってしても制圧できなかったアフガニスタンがわずか1万5千名の兵力によって制圧できるわけです。これは農村を中心に人々がタリバンの秩序を積極的に受け入れたわけでありまして、ブルカをはじめいろんな女性に関する法も、決してタリバンの発明ではなくて大半は農村の慣習法であった。つまり9割以上のアフガニスタン国民にとって抵抗はなかったのです。

ただ一握りの上流階級、ちょっとした病気で簡単に外国に逃れるような人たちが猛反対する。一般の人々というのは英語がしゃべれませんので、タリバン政権下で安住しておったアフガン人はなかなか自分の意見を述べる機会がなかった。タリバンについて率直な話、私はいずれ消える運命にあるだろうとは思いましたけれども、今まで出現したアフガン政権の中で最も清潔な政権であったと思います。賄賂がなかった。

今北部同盟の指導者たちは挨拶回りをしておりますけれども、品がないんです。(会場：笑) タリバンはちゃんと誇りを持って秩序立てていた気がします。実際捕虜の扱いに致しましても、逮捕された外国人にして殺された外国人は一人もいなかったと思います。その少し前に、アメリカの宣教師が逮捕されました。あの国でキリスト教を広めるといっては厳禁で、普通なら死罪ですが、彼らは捕まえたアメリカ

人たちを国境まで連れて来て逃がす。自分たちがつぶれる前に釈放しています。日本人のジャーナリストも一人逮捕されましたけれども、これも国境まで連れて来て帰すということを見ると非常に秩序だっていました。

農民向けの政権でしたから、逆に言うと、現在の都市化といいますか、グローバリゼーションといいますか、そういう傾向とは非常に馴染みにくい政権であったと言えます。いずれ潰されるとは思っておりましたが、こういった暴力的な形で潰れるとは思いませんでしたけれども、私はタリバンについて非常にいい印象を持っております。

今誰が一番タリバン政権を懐かしんでいるかということ、これは国連の職員です。タリバンさえいれば各地域であの飢餓状態の中で秩序だって食料配給もできた。それが今、無秩序のために運べないというのが現実であります。もしアメリカが今のアフガニスタンの飢餓状態で国内治安が乱れて輸送路が乱れるとどうなるかを知った上で、死亡致しました4千名の指導者だけではなくて100万名、国連の発表によると数百万名の餓死者が出ることを見越して爆撃を開始したとなれば、アメリカの罪はなかなか拭い去れるものではない。テロ対策と称してテロをますます煽り立てるようなことをやったと思います。だから、少なくとも空爆は春まで待つべきだったと思います。

話は飛びますけれども、タリバンは決して分からず屋の政権ではなかったと私は思っています。それからあるアメリカ人が一握りの悪いやつにいろんな情報をコントロールされて皆従っているという意見を述べましたが、とんでもない。ああいう珊瑚の塊みたいな所で、効果的な情報コントロールというのは不可能だ。皆が聞いておるのはBBC放送の現地語放送。自分たちについては、自分たちのことですから良く知っている。世界中で最も客観的な判断ができたのはおそらくアフガン人の民衆そのものだったと思います。

タリバンがテレビを禁止したと言いますが、アフガニスタンで電気のある所は3%か4%と限られておりますから農村部に行きますと電気がない所がほとんどです。テレビなんて買えないし、あっても見られない。テレビ禁止と言ったって99%の人は影響がなかったというのがあります。(会場：笑)ブルカに致しましても、外出中は着なさいという昔からの慣習であったわけでありまして、私もいい習慣だとは思いませんけれども、彼ら自身を変えていくのを待つべきであって、そのために暴力的に何百万人も殺して急に変えなくちゃいけないもの

かということを考えますと、私は相対的な正義があるとするれば米国よりもタリバンの方であったと個人的には思います。そのことを言うとは反感を持ったり、本土には脅迫する人もいて『おまえはタリバン派か』と言われるかもしれませんが、(会場：笑) 公平に見て私たちの医療活動を守ってくれてたのはタリバンであったと言えると思います。この話をしますと長くかかりますので、そういうことでご勘弁願います。」

司会：「先生よろしいですか。若い人お願い致します。」

高校生C：「アフガニスタンなどへの援助金をその政府に直接渡した場合、90%以上が軍事資金に変わることについてどうお考えですか。」

中村医師：「詳しいことはよく知りませんが、軍隊に使うお金がかなり多いと言うのは事実です。これは単純な理由ではないと思います。ひとつは軍事援助で誰が喜ぶかを考えれば大体分かる。武器の最大輸出国はアメリカ。フランス、イギリス、ロシア、中国を加えるとそれだけで7割ぐらいです。そういう国が潤ってくる。2つに緊張をわざと煽らせるとしか思われなような動きが国際的に見られる。それで両者が車の両輪のようになっていて軍事費に使われるものは増えてるんじゃないかと個人的には思っております。また、日本では汚職として逮捕されますけれども、現地では普通に汚職がある社会です。途中で現地の人々が猫ばばするだけでなく、外国人も猫ばばする。外国人の請負の組織が組織維持のためにまた取る。末端に届くまでに相当なフィルターがあって、その間に吸い込まれていくのが現実だと思います。ただ私はその道の専門家ではありませんので、そういうことでよろしゅうございますでしょうか。社会科の先生に聞いて下さい。」(会場：笑)

司会：「あとお2人ぐらい。」

男性D：「Iと言います。簡単な質問です。先生の放送とか聞くと、先生はカブールじゃなくてカーブルという言葉遣います。でも用語の表記は全部カブールです。それから英語放送でカブールって聞いたことがありません。それから我々日本人も他国の文化を尊重する意味で、もしくはカーブルでしたら日本の表記も全部直すべきかと思ったりもします。カーブルとカブールの違いは何ですか。どれが正しいんでしょう。先生のご見解をお願いします。」(会場：笑)

中村医師：「日本語になっていけば、私はそれでいいんじゃないかと思えます。例えば、ベイジンと言わずにペキンと言います。それからアメリカと言わずにアメリカと言います。表記もモスクォでなく、現代

ではモスクワが普通になっています。それと同じようにカブールという言葉が定着していれば、無理に現地のカーブルに近づける必要はないのではないかと私個人的には思っております。本当はペシャワールではなくてペシャーワルです。私は現地表記がいいのではないかと思います、それでもあえてペシャワールと地図に描いてありますから従っておるだけでございます。ただややこしいですから、どちらでも分かるようにして頂きたい。全体としてはその地域の発音に近い言葉で言う傾向がありますので、これは国語審議会で審議して頂きたいと思えます。」(会場：笑)

司会：「こちらの女性の方お一人。」

女性E：「若い頃イギリスで生活したことがあるものですから、中東の方たちとも接触があったんですけども、今回の空爆では情報があまりにもアメリカ寄りだったので私も新聞の方にできるだけ現地の状況を知りたいということを書きました。先生は日本の情報の在り方、マスコミの在り方についてどう思いますか。お願いします。」

中村医師：(会場：笑)「この一連の動きには、問題があると思います。私は向こうに長く居りましたので、テロ後日本に帰って来るなり新聞記者が成田空港にいきなりわっと集まってきたのでびっくりしました。その後聞いてみると、どうもアフガニスタンについて知っている日本人が少ないので私たちに注目が集まったということだったのですが、アフガニスタンを知りもしないのにとんでもない議論がなされているということに驚いたわけです。」

私たちは情報世界だ、世界は狭くなったと言っていますが、今度私が切実に感じたのは情報がたくさんあるような世界に生きていて実はそうではない。情報が溢れている中でこそ、情報コントロールは可能だということです。非常に危機感を覚えたわけです。ペシャワール会というのはあまりマスコミに出たがらない。ここに新聞記者の方がおられるので失礼ですけれども、ジャーナリストが大嫌いなのです。(会場：笑) それでも今度ばかりはやっぱり本当のことを言っておかなくちゃいけないと積極的に訴えていったのですが、確かに情報の在り方というのは何かコントロールされている。

さらに、周りがそうしているから自分だけ外れたことをするといかんといい妙な雰囲気は日本にはあります。正直言いますと私たちペシャワール会の中でさえ、『中村先生は政治的な発言を控えて下さい』と言った方がいる。とんでもない。我々は同じことを10数年間言っ

いるのに、周りがそれだけ政治的になっているのです。だから情報というのは恐ろしいものです。講演会であちこちの会場に行っても若い人が比較的多いのは、大人たちがそう言っているけれども本当にそうだろうかと疑問を持っている人がたくさんいるからです。情報は日本でこそコントロール可能であって、アフガニスタンのように珊瑚の塊みたいな所では情報コントロールは効かない。我々が考えているのと全く逆の現象です。今度の報道は、明らかに西側に握られた報道で日本中が躍らされたというのが現実だと思います。

だからと言ってアルジャジーラですか、アラブ側の放送だけが正しかったと思えませんけれども、少なくとも（欧米や日本では）公平な報道はなかったと思います。プッシュの演説にしろ、正直なことを言いますとどうも芝居じみた感じがする。恐ろしいことだと思ったのが、まるで日本人全体が『そんなことを言うと先生襲われますよ』というような雰囲気。とんでもない。『本当のことは本当じゃないか』『俺はあそこに長く居て見てきたんだ』と言うけれども、誰も耳を貸さない。皆は自衛隊派遣に傾いていますから、『先生、そんなふうに反対すると会が政治的な目で見られますよ』と言う人がいますけれども、そんな会なら潰れたっていい。こっちはただ事実を述べているだけなのに、政治的に取られる一種異様な状態であった感じが致します。ちょっとくどくなりましたけれども、これでよろしゅうございましょうか。」

司会：「はい。次のご質問の方お願い致します。U先生お願いします。」

大学教授U：「沖縄大学のUです。環境問題をやっているものですから、先生の話の中にあつた現地の融雪現象から、経験的に地球の温暖化を確認できました。その他にもやはりそういう地球全体の変化が反映している兆候があつたら教えて頂きたい。別に定量化せず、感覚的なものが大切だと思います。どういう分野でも、どうもこの辺が気になるという程度で結構です。」

中村医師：「私は元々山に興味がありました。現地で遭遇することは、まず雪の線です。夏の雪線がこの10数年、年ごとに上がっていった。大体现地で20数年前は雪線が3400、3500mだったと思います。それが今4000mの地帯まで上がっている。雪の溶ける量が減ってきているのと、積雪量も減ってきているという2重の状態です。

もうひとつは地元の人もそんなことあるのかという出来事がある。それは氷河の崩落です。今まで雪崩はよく見られましたが、かなりの規模の山で、おそらく何千年、何万年もかけて蓄積した氷の塊である

氷河そのものがゆるくなって滑り落ちてくる。地域によっては氷河が滑り落ちてきてダムを作り、川をせき止めて洪水がおきる現象も2000年8月3日にチトラルという地域でありました。さらに今年の7月になって同じ所でおきている。だから世界の屋根の少なくとも（稜線の）西側では今まで住民が体験したことのないような天変地異が起こりつつある。はっきり長老たちも認めています。

おそらくこれと関連してでしょうけれども、地下水位が年々下がってきている。我々は井戸を掘っておりますから、去年と今ごろを比べて見ると、大体年間30cmから40cmのスピードで下がっている。これは恐るべきことでありまして、ペシャワール側でもパキスタン側でも下がっている。山岳だけではなくて、山岳の周囲の平原部も地下水も含めて何か水の流れに異変が起きているとはっきり言えます。だから5年、6年するともう砂漠化するであろうと私は思います。」

男性G：「貴重な講演ありがとうございます。私は中央アジアと東南アジアの教育機関を拠点にお手伝いさせて頂いている者です。最近インドのカシミール地方から帰国しました。長期的に渡って、地域に根付いたお手伝いをなさっていて、今日の講演をお聞きしまして、一人の日本の青年としてとても心強い意見を頂きました。本当にありがとうございます。私がお聞きしたいのは今現在パキスタンとアフガニスタンの隣国の関係です。自分はやっぱり日本で報道しているニュースでは、表面的にしか伝わらない場合が多いと感じています。私もこの間行ってきましたカシミールではパキスタンとの仲もあまり良くないですから、紛争が絶えず起きています。具体的をお願いします。」

中村医師：「アフガニスタンとパキスタンの関係ですか？」

男性G：「その周辺国ということ。」

中村医師：「カシミールについて？」

男性G：「隣国、中央アジアのインドとか、パキスタン、アフガニスタン、周辺諸国ということをお願いしたいのですけど、よろしいですか。」

中村医師：「実は私はよく知りません。（会場：笑）本当に私はアフガニスタンと九州のことしかよく知りません。（会場：笑）イスラム教は国境を越えて、ヨーロッパ人が言うインターナショナルな性質を持っているのは事実でありまして、何らかの助け合いが存在する。そういうつながりは消えないと私は思います。悪くするとアルカイダとかテロの国際組織になりますが、だからどうすればいいかはよく分かりま

せん。例えばアフガニスタンにしましても、チェチェン共和国とかウズベキスタン、タジキスタン、もちろんアラブ、あらゆる国籍の国際軍があそこに集結していた。そういうイスラムの持つインターナショナルイズムが裏目に出ればああいう軍事的な援助が起きます。

実は西洋諸国にも言えることで、何だかんだ言ってもキリスト教徒は優遇されることもある。『あなたはイスラム教徒ですか。タリバンを擁護して。』とよく言われますが、実は私はキリスト教徒です。我々以上にイスラム教徒はそういうインターナショナルイズムが強くて何らかの助け合いは起こさざるを得ないし、起こさないとまた非難される体質を持っていますから、私は現地でも何らかの交流がポジティブな形で続いていくことを望んでいます。あそこで切ってしまうのは無理です。一方、近代的なナショナルイズムも育ってきていまして、私が恐れるのは逆にナショナルイズムが力を持つてくると今度はユーゴスラビア化する現実があります。その辺に矛盾がありまして、元々あんな所に国境を引いた人がおかしいというのが私の正直な感想です。これぐらいでいいでしょうか。私、よく知らないです。」(会場：笑)

司会：「ありがとうございます。たくさんの質問を本当はお受けしたかったのですが、実は第2会場の506号室で共同記者会見があります。ついでにあちらの皆様にもご質問をお受けしたいと思いますので、この会場でのご質問はこれで打ち切らせて頂きます。引き続きまして、与勝高校、それから平井さん、あと二、三の方がペシワール会に特にご寄付をお持ち頂きましたのでお越し下さい。関係者の方どうぞ。」

司会：「それでは与勝高校の皆さん、一言ご挨拶をして下さい。実は皆さんは中村先生と文通をしておられて長い交流(会場：笑)短い交流の中で一挙にいろんなことに取り組みました。新聞でもご覧頂きたいと思います。本当に時間がなくて私説明できませんけれども、どうぞお名前をおっしゃって中村先生へお渡しください。」

与勝高校平和を願う実行委員会：「私たちは与勝高校2002年平和を願う実行委員会の一同です。私たちは与勝高校で6月に平和の舞台を行っておりまして、この時に沖縄戦を学びました。そして9月にテロ事件が起こって、10月、11月とアメリカの報復戦争が始まった時にちょうど中村さんの手紙を私たち与勝高校生は読んで、沖縄戦の時も子ども、女性、老人、そして障害を持った方が一番最初に殺されたところと、今のアフガニスタンの現状がやっぱり共通しているんじゃない

いかと思いました。自分たちでできることから何かないかと12月31日の大晦日から元旦にかけて『ピースフルニューイヤーコンサート』を企画してその時に来てくれたお客さん、そして私たちの手形がこの布です。コンサートの収益金10万8千円を持って今日この舞台に上がっています。どうぞ私たちの想い、そして私たちのコンサートに来てくれたお客さんの想いをアフガニスタンに届けて下さい。」(会場：大拍手)

与勝高校平和を願う実行委員会：「与勝高校2002年平和を願う実行委員会一同よりよろしく申し上げます。」(会場：大拍手、大歓声)



司会：「ありがとうございました。与勝高校の皆さんでした。わざわざ今日のために与勝から駆けつけて頂きました。(会場：拍手) 続きまして平井真人さんよろしく申し上げます。」

平井真人：「どうも、平井と言います。昨年の10月に那覇のパレットで『うないフェスティバル』に参加しました。平和をどういう形に表現できるのかというテーマで『ピースTシャツ展』を企画したわけです。いわゆる商品としてのTシャツじゃなくって、気持ちを形にしてほしいという趣旨で開催しました。そしていろいろな形で若い人たち自身が今まで経験し、学んだことが具体的な形でTシャツにデザインされたわけです。また見る人にとって非常に大きな力となったという次第です。ここへ来た方々が500円以上の気持ちで購入してもらい、15点売れました。1万1千円余ですが、中村先生に託してアフガンのいわゆる弱者の人たちに使って頂きたいなと思ひまして今日持ってきました。中村先生よろしく申し上げます。」

司会：「平井真人さんは、県立芸大の染色科のデザイン専攻出身でいらっしゃいます。(会場：大拍手) ありがとうございました。まだ寄付をお手渡しなさりたい方がいらっしゃったはずですが、今お見えじゃないでしょうか。」

第一会場は、引き続き「2002年の平和を願う実行委員会」によるダンス、中村先生は第二会場へ移動

(会場：拍手)

司会：「この会場の皆様には、本当に我慢して頂きまして申し訳ありません。共同記者会見を5時から始めさせて頂くので、それまで若干の質疑をさせて頂きたいと思います。とりあえず、どのくらいいらっしゃるでしょうか。手をお挙げになって下さい。向こうの会場だと先生のお答えがかなり長かったので、なるべく6人か7人くらい発言させて頂きましょう。時間を上手く使うために、発言する方はこちらに待機して頂いて、ここで発言して下さい。よろしいですか。お願いします。」

男性H：「先生、バーミヤンの石仏破壊のことで支援文にもお書きになっていましたけれど、改めてお話を聞かせてもらってもよろしいですか。」

司会：「一通り質問を受けてからでもいいですか。私が質問全部を受けますから、次々に前に来て下さい。」

学生I：「中村さん、自分は沖縄の大学で医学部に通っていますが、将来は具体的にどのような医者になろうとまだ全然決めていないんですけども、自分のように将来医学に携わる学生に何か求める事ってやっぱり医者になることですか。理想の医者像を聞かせて下さい。」

司会：「次の方どうぞ。」

男性J：「先生はクリスチャンとおっしゃいましたけれども、今イスラム教徒の中で仕事をしていく上で、クリスチャンであると言うことで彼らに対して何か疑惑とか警戒心を生むようなことは無いのでしょうか。それとも現地でクリスチャンとおっしゃっておられるのでしょうか伺います。」

司会：「手短かに発言頂いてありがとうございます。次どうぞ。」

男性K：「今年会社を定年退職しました者ですけれども、JICAの件です。ぜひあの辺の治安の落ち着いた時点でJICAに参加したいと思っていますのですが、生命の危険性とか、(会場：笑)あるいはどのような仕事か現地で一番重宝しているのかなどをお聞かせ願いたいです。」

司会：「次どうぞ。」

高校生L：「K高校1年生です。今、英語の授業で中田正一博士の事を学んでいます、その方も九州大学卒業なのでもし何か接点があったら

教えてください。(会場・笑い) もうひとつは、あちらの国で働いているスタッフに日本人もいると思いますが、私たちは近代化したこの世界で生きていて現地で通用するのか聞きたいです。」

中村医師：「2番目のやつ。」

高校生L：「伝えにくいんですけど、今日本でこうやって何不自由ない生活をしていますが、アフガニスタンとかに行って井戸を掘る時とか原始的な方法を使いますので、私たちの持っている能力で通用するのか聞きたいです。」

中村医師：「向こうで働きたいわけですか。」

高校生L：「はい。」

中村医師：「行った時に役立つかどうかですよ。」

高校生L：「はい。」

司会：「他に質問なさる方はいらっしゃいますか。一人ひとつの質問でよろしくお願ひします。できるだけ回します。」

高校生M：「S高校の1年ですけど、将来報道関係の仕事に就きたいと考えています。外国で仕事をしたいのですが、日本とやっぱり考えが違うじゃないですか。今日本で普通に生活している中で、国家とか公平に考えるようにするにはどう言う事を心がければいいか教えてもらいたいです。」

女性N：「今日はありがとうございます。沖縄に基地が在って、ここから戦闘機が飛んでいくことに関してです。新たに浦添軍港とか「辺野古」とかどンドン決まってくるのですが、何か答えを私たちが建言を持って、まるで地雷を飛ばしておいて後で義足を贈るような構図になっていないのか、今日のテーマの『沖縄はこれでいいの』について先生の考えを聞かせて下さい。」

司会：「後とどのくらいいらっしゃいますか。はっきり手を上げて下さい。時間がもう少ないので、あと4人で締め切らせて下さい。」

男性O：「先生は1号館の会場で『アメリカ政府よりもタリバン政権の方がいいように見える』とおっしゃいましたけれども、ではアフガンの地域でタリバン政権が退いて、とても嬉しいと喜んでいる地域の人々をテレビで見たのですが、その点に関してどう思いますか。」

学生P：「私も医学部の6年ですけども、豊かな国は貧しい国の豊かさを奪って生きていてよく聞きますが、私たち日本人は貧富の差を無くすためにどうやって生活を変えていけばいいのですか。」

男性Q：「基地病院のことについて、教えて頂きたいです。」

司会：「最後。」

男性R：「向こうでハンセン病の患者さんは隔離されているのか、私も医者ですがどう関わっているのか聞きたいです。」

司会：「ご質問その他いろいろあったと思いますが、ご協力頂いて本当にありがとうございます。できるだけ手短かに回答お願い致します。」

中村医師：「盛りだくさんで舌足らずかもしれませんが、不満であればまた後で質問して下さい。バーミヤンはハンセン病の一番多い所です。実は私はあの前後、その下調べにちょうど行っていまして、爆破現場に居合わせました。バーミヤンについてたくさん言いたいことはあるわけですが、掻い摘んでいくつか話しますと、ひとつは世界的な関心は仏像が壊れるか壊れないかだけに集中しておって、先ほどの行動の視点を質問された若い方おられましたが、それと関係して、やっぱりその地域で外国人に言葉を伝えられない多くの人々の惨状は全く伝わらないです。もうひとつ私が強調したいのは、天災は人間の徳がすたれた時に起こると言う信仰があります。だから日本でも今も一部ありますが、昔は雨乞いの儀式をした。偶像破壊もその一環であったわけです。さらにわかりかし皆に知られてなかった事は、バーミヤンは大仏だけではなくて他にたくさんのガンダーラ仏があって、想像できないような額で取引されている現実があった。それが行政の腐敗に一役買った。こんなことするから神様が怒って我々に干ばつを下すという宗教的な意味をこめて破壊したのです。ただ、あまりに世界的に有名な仏像だったので、いろんな機関が世界中をあげて反対したのが真相であります。私としては仏様が生きておられたら、あの時点でやっぱり人々を救う。この石の仏像にこだわって百万人が死のうとしていた。そのことがなぜ伝わらなかったか、と言うところに何かニュースの話題性の倒錯があるような気がしました。その時の感想としては、生きた人間にもう少し注目して欲しかった。

私は、強いて言うなら『三無主義』。『無思想、無節操、無駄』をモットーにしています。こんな事を若い人に言いたくないですが、いろんな思想にこだわらない事です。無思想。それから無節操で、誰からでも募金をもらう。私は乞食からでももらったことがあります。

話がそれますけれども、アフガニスタンに行って間もない頃、言葉がよくわからないものですから、言葉を覚えるために町をぶらぶらした時期があります。その時に、乞食が寄って来て『金をくれ』と言うのです。向こうの乞食は非常に堂々としていて、『おまえの為だから

出せ』『神が喜ばれます』と言うので、私はむっとしました。覚えたての言葉でしたから使うのは嬉しかったのですが、『ちょっと乞食にしては態度がでかいんじゃないか』『右や左の旦那様と言って、頭が低かったら握りが多かったんじゃないか』と言うと、『とんでもない、あなたは神を信じてないな』と言います。『貧しい人に施すのが神様に対して徳を積むことであるから自分のためだ』と言うのです。『私も東の国の遠い日本から来て、ハンセン病の人のために仕事をしている、それも神様に対して徳を積むことになるんじゃないか』と言うと、『その通りです』。『それに対してあなたは募金ができるか』と聞くと、乞食が募金してくれたんです。私はびっくりして、神様を引き合いに出して失礼したなと思いました。

無節操、無駄には失敗もあります。失敗をしない方がおかしい。公共機関や国連みたいな国際官僚機構でなかなか会談が進まないのは、いつもうまくいったと発表しないと組織で生き延びられないからです。若い人に特に言いたいのは、失敗は若者の特権だということです。失敗を正直に言い、謝って改まるにはばかりなことなかれで、間違いと思えばサッと直すのが、私たちの方針でもあるわけです。どれだけ役に立つかわかりませんが、高校生、医学生に対するメッセージは、別にあんな所に行って、たまたま私は脚光を浴びてテレビなんかに出ていますけれども、そんな活動もありますけれども、どこに居てもその人の立場になってひとつの隅をじっくり照らして患者さんのために一生懸命やればいいと思います。

こればかりは我々が決めることではない。置かれた所で一生懸命やるに尽きると思います。言えば説教くさくなりますので、一応これでよろしいでしょうか。それとイスラム教徒の中で私は確かにキリスト教徒と公言しています。向こうではクリスチャンが日曜日に教会に行くように、金曜日モスクに集まります。その時、『私はクリスチャンでございます』と言って、排斥されたことは別にありません。不思議と無いです。ややこしくなるのはキリスト教の宣教師が来た場合です。つまり、邪魔されなければ、自分も邪魔しない。しかし、その人の信仰をとやかく言う人が入ってくると、それに対しては猛烈な反発をするのが一般の気風だと思っています。

JICAに関しては、おそらく国家的な支援をお聞きになられたと思いますけれども、向こうは八百長社会でありまして、こう言うとおかしいですが地縁、血縁を中心とする社会です。例えば、今私たちが

自由に国境を往来できるとか、トラボーラを攻撃したのが元タリバンの兵隊さんだとか、反タリバンの人たちとタリバンの兵隊達ที่บ้านに帰ったら仲良くご飯を食べていたとかです。今干ばつが苦しいですから、穀物を買うためにお金が必要です。米軍の運転手で、給料が1日600ドルだそうです。何年かかっても貯められない額ですから、皆行きたがります。その人から直接聞きましたら『おまえは反タリバンか』と聞くと、『うちにはタリバンもいれば反タリバンもいる』と言います。うちの作業地の近くですから、『トラボーラはどうだった』と聞くと、『ドクター、おもしろかった』。何がおもしろかったかと言うと、米軍が武装して武器を配っていて、タリバンの関係者を捕まえるとともに賞金を出すので、捕まえたと報告をしてお金を貰ったところで、相手と同じ村の人なら逃がすそうです。おまけに彼らの一部がその米軍から貰った銃で米兵を撃ち殺すそうです。誰が撃ったか分からない。そう言う社会でありまして安全性では欧米人、英米人に近づかなければ安全だと言えると思います。

何が必要か。たくさんありますが、アフガニスタンは農業国なので農業のインフラ整備が必要であって、決して日本みたいに工業、商業社会を中心とするインフラではなく、地域循環型の農業の支援です。しかし、即効薬としては日本が最も得意とし、しかも最も批判を浴びやすい建設、土建の仕事がいい。カーブル市内で物は流れているけども購買力がない状態で、市内の3分の2は灰となっておりますから、もう道路も本当にひどいです。なぜそれをやらないのか、本当分らないですけども下手に人道援助などと言って地雷撤去に金を使うよりも、建物の建設や道路の整備など建設的な仕事をどんどんして、一時的にも失業者を吸収した方がいい。今の失業者は田舎から流れてきている人、しかも、土地に愛着を持っている人ですから必ずそれを持って、農村の復興に投資するはず。NGOができないが大きな仕事としては、ダムの建設、これも墾墾を買う場合が多いですが今だと喜ばれるでしょう。運河の建設など、国家としてやらなければならない事はたくさんあるわけです。建設業と言うとすぐ日本国民はJICAの汚職を思い出シアレルギーを持っておりませんが、今のアフガニスタンにおいては非常に即効性のあるいい仕事だと思っています。ただし庶民に金が落ちるようにしなくちゃいけないと言うことです。

次の回答として、中田先生との接点は本当に偶然、海外の仕事の振り出しがアフガニスタンだったのです。その後、あちこち回られまし

て『井戸掘り名人』と言われて、十数年前にソ連が帰りはじめた頃役に立つことはないかと再びおいでになりました。それがまた、ペシャワール会と意気投合していたのは、やはり援助に関する考え方です。中田先生がしょっちゅうおっしゃっていた言葉が『助けることは助かることだ。人のために何かする事は人扁に為（タメ）と書いて偽る（イツワル）と読む。人のためにすると言うのは嘘だと、人を助けるのは助かることだ。』と、私たちも全く同感です。中田先生は熱烈な農業主義者でありまして、この点も私は医者ですけれども、農業は人間を自然につなげ止める底力になるものであると思っています。中田先生とは非常に縁が深かったわけです。今でも風の学校の井戸堀事業を通じて、中田先生とはあの世でつながっております。

次の回答として、アフガニスタンで役立つかは場所次第、時次第でしょう。私たちがワーカーを経営する時に当たり外れが非常に大きいです。日本でヒューマンイズムに燃えて現地で挫折して帰って行く人もたくさんいますし、日本で恋に破れて失恋の傷を癒すために来る。案外向こうが気に入ってうまくいく。だからペシャワール会の待遇としてはまず体さえ丈夫であれば、動機は問わないのが募集要項であります。（会場：笑）現地に行つてまずやってみて、いけそうなら愛着を持って居ればいいし、いやになれば帰ればいいと言うのが私たちの方針です。だからあなたが向こう行って役立つかどうかは、神様が決めることであつて、私たちはとやかく言えない。役立つかもしれないし、邪魔になるかもしれない。（会場：笑）やってみなきゃ分からない。初めてでも張り切らずに、ともかくアフガンに遊びに来て下さい。一般論としては、役に立つ人もおれば、役に立たない人もおる。易者みたいなことを言いますが、（会場：笑）実態はそういうことで、まず見てみることです。

次に、報道関係で外国で仕事をする時に公平な目で見るとはどうしたらいいかという質問ですが、まさに私たちが遭遇してきた問題でいい質問だと思います。まず自分を省みる謙虚さがひとつ。先ほど『文化』と言いましたけれども、私は元精神科医だったことがあつたので特にそう思いますけれども、人が一人一人違うように地域もひとつひとつ違う。しかしその違いと言うのは文化的な違いは決して劣つておる、優れておる、それから進んでおる、遅れておるといふものさしで見るとはいけない。それはそれとして受け入れることが大事だと思います。

例えば教育問題。日本が教育援助をすると言うことですが、私は教育援助するよりも土木援助をしたほうが良いと言うのは、日本自身が教育問題を抱えていながら何で人に教えられるのかと言うのがひとつ、教育と言う時に私たちは何をもって教育と言うか。教育とは飯を食っていくための技術を授けることであれば、お百姓さんはお百姓さんの手伝いをしとけば生きていく技術を覚えます。人間として正しい気持ちを持つためであれば、現地で皆金曜日にモスクに行って人間がしていいこと、していけないことを教えますから教育になっているわけです。だから近代的な日本で行われておるような読み書きができるだとか、偏差値が高いとかいう目で人を見るような教育は現地では必要ないだろうと私は思います。何が言いたかったんですかね。(会場：笑) 公正な目で見ると識字率でもってその地域の文化度が分かるだとか、学校がないから遅れた所だとかで決して見てはいけません。

それから、沖縄の基地についてどう思うかという質問でしたか。どなたでしたか。」

女性N：「はい。」

中村医師：「基地について私がどう思うかと言うことですか。」

女性N：「基地についてというか、今日のタイトル<世界は、沖縄は、これでいいの?>」

についてどう思いますか。」

中村医師：「『これで駄目』ですよ。(会場：大爆笑) 私は特にニューヨークのテロ事件を見ていて、沖縄の基地も狙われるかもしれないと思いました。それはあり得ることで、『これでいいの?』でも、『これでいいのか!』でもいいですけども、『これじゃいかん』と私は思います。一番いい方法は、まずここに基地を置くと決めた人の近くに基地を置いてみればいい。(会場：拍手) だから、東京あたりなんていいじゃないですか。(会場：笑) 私は安保がいい、悪いという政治的なことは分かりませんが、決めた人がぬくぬくと安全な所に居て、嫌がる人の所におくのはやっぱりフェアではないと思います。首相官邸と国会の横に置けば彼らも考えが変わるかもしれないし、本当に信念を持って基地を置いているのであれば彼らは危険を求めべきだと、(ブッシュ大統領がテロ報復戦争と言ってビン・ラディンを捕まえるためにアフガニスタン上空爆したように) アフガニスタンのかも知れませんが私は東京の迷惑まで沖縄が尻拭いする必要はないんじゃないかと思います。ただその際にどうやって食っていくかとい

ろんな問題が出てくるかも知れませんが、このままではいかんと、特にテロ事件の後そう思います。よろしいでしょうか。(会場：大拍手)

次の質問で、タリバンとアメリカ。タリバンの方がいいと私が言ったと言うのですが、すいません、どなたでしたか。]

男性0：「質問の主旨はテロ事件の映像を見て、地元のパキスタンとかの人々が喜んでるシーンがこちらでかなり報道されていました。」

中村医師：「はい。」

男性0：「その様を見てどう思われるか。」

中村医師：「これも作られた映像のひとつだと思います。少なくとも私が知っている99%の人は『まあ、あんなことをして』と思っていました。一部の狂信的な人、それから災害を受けて本当に困ってない人たちは喜んだのが実態でありまして、確かに日本人の中にも『私、あれ見てスカッとした』と言う人もいます。ただ死んだ人のことを考えると皆スカッとはできないわけで、どこか『罪もなくあんなことをして』という怒りだとか悲しみに似たものが人々の中にまず広がったのは事実です。

けれども、アフガニスタンが攻撃されると、何で自分たちがやられなくちゃいけないのかと反米意識が高まってきたのは事実だと思えます。彼ら自身が23年間内戦で苦しんで随分肉親が戦死していますから、むしろそういう人々に対する同情の方が強いかと思えます。しかし攻撃されれば敵意も当然でありまして、実際アフガニスタン全土で罪もなく死んだ人は4千人以上いるわけです。それだけではなくて、先ほどもお話したようにこの時期に攻撃を開始すると100万人以上の人が死ぬのはわかりきっている。それを知っていて攻撃を開始したことに対する怒りが強かったのであります。タリバンを私は無条件に肯定しているわけではありませんが、今まで見た権力の中では最も秩序の正しい政権であったと言えらると思えます。反米意識は中近東全体で共通してしまっていて、それだけ皆深い恨みを持っています。そのことについてもっと考えるべきではないかと思っております。

貧富の差を無くすにはどうしたらいいか、人類の永遠のテーマだと思えます。私は無くならないのではないかと考えていますが、あまり言うとは皆不安に思いますけれども、ひとつははっきり私がある程度事情のわかる人についてよく言うのは、何かの終わりの始まりである。アフガニスタンでの出来事は非常に象徴的である。かたや消費生産を無

限に繰り返していないと生きていけない社会がある。かたやこういう小さいペットボトルでも家の財産とするように、物を大切にできる社会があるのです。貧富と言うけれども、おそらく物質的な貧富を言っていると思いますが、今後も拡大する一方だろうと思います。

工業資本の場合、一昔前は人間の必要性に応じて物を作るという状態ですが、作っては捨て、消費しては生産し、今やそうじゃない。お金の都合によってマーケットが作られる。そこで無限にお金というのが増殖してないと生きていけない。もう人間を離れてお金自身が増殖している世界ですから、そう長続きしないのではないかと。地球温暖化がある。このままどんどん上がり続けていけばどうなるか。地球環境問題と経済活性化は絶対に両立しない状態に我々直面しているとなりますと、これは貧富の差を無くすためにはどうしたらいいか。どうしようもないけれど、例え今の世界が滅亡しても驚きません。(会場：笑) 論理飛躍のようですけれども、私はそう思います。

ちょっとした貧しさのためにぶつぶつ言わない。特に沖縄はひどかったらしいですが、私も終戦直後の46年生まれですから、ひもじい体験はよく覚えておりますけれども、人間というのは案外強い。食い物さえあれば何とかなるくらいの開き直りで、気分は返って明るくなる。だから何かこれを持ったから守ろうとかいう気持ちを少しずつ無くして行って、世界が破滅しても食っていく道はあるという覚悟をしている。無くすと言うよりは、無くなった状態に適応するための訓練をすると私は思っております。

次の質問、基地病院についてはちょっと抽象的ですが、3年前に建てられまして全体で70床。現在10カ所の診療所のセンター的な役割を果たすと同時に、教育機関でもある。現地では比較的新しい形態でありまして、アフガン政府、パキスタン政府も無医地区の診療とか真剣に考えています。ところが彼らは福祉費がほとんど無い中で診療所は作るけれども、赴任する医者がないのが現実であります。山の中に行けば、空の診療所がごろごろしている状態です。やはり日本と同じで、医学の進歩に遅れるという脅迫的な進歩思想に取り付かれているのが現実でありまして、医者はどうしても儲けやすい都市に集中する。その中で、私たち基地病院の機能のひとつとして重要なのは、1ヶ月交代で勤務をまわすのです。最低3ヶ月に1度は遠隔地勤務が義務付けられています。だから家族がベシヤワールとかカブールとかいう都市に居りまして、3ヶ月に1度の出張であれば可能であると

続いています。

また、ハンセン病についての回答ですが、隔離政策はありません。しかし、これも文化の問題に触れますけれども、おかしいことにハンセン病対策として外国から手が入れば入る程、偏見が増えてくる。これはどういうことかと私は初め訝ったわけですが、日本ほど強い偏見は無いのに、ある村に行ってハンセン病の人だけちやほやしますと、特別な病気と皆が思い始める地域がある。地域格差がありますが、一般的にそうです。特に私が医者として気をつけていることは、特別扱いしないことです。一般の診療所で、一般の感染症のひとつとして診る。例えば皮膚結核のようなものだと言います。使う薬も結核と似ているのです。『ただあなた長くかかるよ』と言います。人によって違いますけれども、ハンセン病と言う病名は使わないことにしています。しかしあんまり言うことを聞かずに薬を飲まないで悪化する人については、手のない人を連れて来て、『おまえ薬を飲んでないこうなるぞ』と言ってわざと見せることもあります。地域地域その一人一人によって違いますけれども、とにかく特別視をしないことを念願に診ております。大体の質問は終わったと思いますが、質問の趣旨が違っていたと言う方がいたらどうぞ。』

司会：「中村先生、ここを5時半に出ないと大変厳しい状況で共同記者会見の時間もほとんど食い尽くしたので、あと2、3分で共同記者会見を始めたいと思いますが、その前に中村先生に拍手をお願いします。」
(会場：大拍手)

杵岐一郎（閉会のあいさつ）：「特に今回は高校生、沖大生の諸君、女性の方々それから市民の方々が協力して実行委員会を運営しました。十代の方と70歳を過ぎた私が共同できるのは、本当に感激でした。厚く御礼申し上げます。沖縄大学がこの部屋ともうひとつをただで貸してくれました。体育館と言う意見もありましたが、とてもそんなに人は集まって下さらないんじゃないかと思っておりましたが、実際嬉しい読み違いがありまして900人を超える方々が今日は集まって下さいます心から御礼申し上げます。特にこの第2会場は人が溢れるばかりでございまして長時間立って聞いて下さった方もいらっしゃる心からお詫び致します。ただ我が校の新崎学長も向こうのお部屋でやっぱり終始立って聞いていたということで僕はちょっと感心しま

した。中村さんのお話は大変私どもにいい教えを与えて下さいました。中村さん本当にありがとうございました。記者会見やっぱり共同でやりますので、皆さん記者会見のモデルと思ってここでご覧になって下さい。では始めます。」

(会場：拍手)

記者S：「皆さんからいい質問がたくさん出ていたので伺うこともないような気もしますが、沖縄の皆さんに伝えたいことを今一度お願いします。」

中村医師：「冒頭で学長が代弁してくれたように、アフガニスタンで起きていることは沖縄と言わず全世界の人々の運命に関わる問題の象徴であると思います。それを肌で直接感じ取っておられるのは沖縄の人々ではないかと学長の話聞いて思いました。主催者自らが、冒頭からそんなことを言ったことはない。自分の問題の一部として捉えていることに私としては共鳴者を得た思いであります。反米だとか親米とかを抜きにしてやはり沖縄の置かれた特殊な立場を全世界で起きている出来事の一部として、沖縄の問題とアフガニスタンの問題とどこかつながっておるところがある。それを見極めて必要に訴え続けることだと思います。私はあまり率直過ぎて人の反感を買うことがあります。まず私は基地を東京に移すべきだと思います。(会場：拍手) その上で国会議員の先生方に考えてもらうのが一番いい。東京都民が嫌だと言えよそに移ればいい。そんなに嫌ならなんでよそに持ってくるのか。これを考えるのが普通の道筋でないかと思えます。それは訴えたいことじゃなくて私が勝手に思っていることですが、そうなんです。是非訴えたいことの要はアフガニスタンの問題と沖縄の問題は分かち難く絡み合っておる。しかしただ政治だとか軍事だとか、あるいは経済構造だということではなくて、これは人類の未来に関わりあう重要な局面を含んでいることを忘れずにそれを訴えて説得力があるのは沖縄の人々自身であると思います。私がわあわあ言っただって結局あなた沖縄にいないじゃないかと言われるでしょうから、説得力がないのと同じです。他にありましたらどうぞ。」

司会：「時間も無いので簡潔に。どうぞ。」

記者T：「共同通信ですが、先ほどテロ対策法はピンはけだと言う話をされていましたが、確か湾岸戦争の時に日本は金だけ出してと批判を浴び、その時の強迫観念で今回政府は人を出そうと、何かをしなければ

と絞り出したやり方だと思いますが、ただこのやり方も日本として取るべき道でないとすると、現地にいらっしゃって我々はどうするべきなのか、何をすべきなのか、そこについてお聞かせください。」

中村医師：「人助けをすればいいんです。それだけでいい。そして下手に政治や軍事のことに首を突っ込んであんな複雑な社会で、しかも複雑で陰謀に満ちた国際社会の中で生き延びるのは難しい。墓穴を掘らないことが先だと思います。具体的にはずるいやり方かもしれませんが、政教分離です。中立性を鮮明に出す。現地で助けないといけないことは山とあるのです。戦争どころじゃない。それについて日本政府が大いに乗りだせば、私はこれこそ最高のテロ対策ではないかと思います。米軍がアフガニスタンでの空爆でテロ対策を行ったと言いますが、テロリストをやっつけようとした対策ではあっても、テロを防止する対策ではなかった。実際あの爆撃で死んだ親の子どもが育ちあがった時が次のテロリストの予備軍だとすれば、今までのテロリストの100倍、1000倍を生産したことを忘れちゃいかん。

テロ対策法の件で、私が国会で具体的に聞かれたのは難民が出てくることについてです。難民を支援するために飛行機を飛ばし、自衛隊を出すと言います。とんでもない。『難民は出てきませんよ』と言いました。まず自衛隊をあそこに派遣させて軍隊として認めさせることが先だとしか思えない。自衛隊派遣については『本当に忌憚のない意見を』と言われるから『有害無益』と言ったら、『忌憚なく言えば、取り消せ。』と言われました。失礼な話じゃないですか。だから百害あって一利なし。暴力でことを解決しようとするそのことが既に憲法違反なのだ。国の掟を守らない国家が大体ありうるのかと私は言いたい。誇りが無い。テロ対策法は、そういう意味で非常にピンぼけであった。本当の意味のテロ対策になってない。それより治安を強化し、情報をじっくり集めることに腐心すべきだと思います。」

司会：「時間です。それでは拍手をもう一度頂きながらご退席して頂きたいと思います。どうもありがとうございます。」

(会場：大拍手)

司会：「ご報告致します。ご寄付金が全部で96万ございました。あと協力金もあると思います。沖縄の今日の善意は、中村先生を通じてアフガンの皆様へ是非お届けしたいと思います。中村先生今日はありがとうございました。(会場：大拍手、口笛) 皆さん今日は長丁場でありありがとうございました。」(会場：大拍手)

— 中村哲沖繩講演会受講者の声 —

1. 大学に進学した後の目標ができた。

学生 M・S 読谷村在住

2. 高校生、大学生、おじいさん、おばあさんがやりましたね。とても感動しました。世代をこえてこれからも続けてください。ありがとうございました。

S・Rさん 熊本市在

3. とても良かったです。高校生と大学の先生が一緒になってやる事が、とてもすごいと思いました。

学生 T・Kさん

4. 今日は中村哲先生の講演を聞ける。こんな事を胸に抱き期待してきましたが、本当に心に残る講演でした。本や雑誌の意見を読むと、やはりアフガニスタンの実情を知っている中村哲先生の意見を直に聞けたらなと思っていました。実際聞いて予想以上のものでした。講演会に関する意見はというと、この企画に携わった皆様方のご協力に感謝しますという事で十分だと思います。もちろん先輩にも感謝します。

I・Sさん 沖繩市在住

5. とても貴重な時間を過ごす事ができ、感動しました。タイムス

の新聞記事で中村さんが書かれた文を読んで以来、アフガニスタンと米国の戦争、日本の対応に疑問を深めていたので、今回実際に話を聞くことができ良かったです。困っている人が本当に必要としているものは何かという事をあらためて考えさせられました。中村さんの飾らないお人柄、とても心打たれるようなものがありました。いろんな壁や、余分なものを取り払い、まっすぐ人を見る目を自分も育てたいと思います。高校生や若い子供が、自発的に関わっている姿勢もすごく心強いものを感じました。この講演を企画、運営して下さった人々に感謝します。

I・Mさん 那覇市在住

6. あまりの人の多さにおどろく、会場に入りきれない人達が音声のみで講演を聞く、ビデオも見えない。ちょっとお粗末すぎじゃないか！やるならもっと皆に納得できる内容を提供すべきです。これじゃ、消化不良をおこし、せっかくの講演が台無しです…。途中にてビデオが起動、よかった。中村先生の講演は、とても興味深いものです。現地で17年もいれば、良いところ悪いところすべてを含めて自分なりに、自分の眼で見たところのアフガンを私達に伝えられ

る事にとっても感謝します。マスコミでしか伝えられないタリバン政権、テロの事、それは一部でしかない、全てじゃない、という事。アメリカの罪の深さ、私達がどんなにアメリカにコントロールされているか考えたら怖い事です。片寄った情報が私達に与える影響は、とても大きいと思います。

K・Tさん 糸満市在住

7. 沖縄でこんな講演会が実現された事がうれしいです。メディアなどから聞こえる情報に惑わされがちですが、今日、生の声を聞いてよかったです。私ができる事を考えていきたいです。今後30年、先生の活動に終わりはないですが応援していきたいです。いつまでたってもアメリカびいきの日本の中で、先生のような日本人が存在する事が励みになりました。意思をもち続けて生きたいです。頑張ってください。私も頑張ります。

I・Sさん 宜野湾市在住

8. 中村さんによるアフガンの歴史と現状を聞いてよかった。人間らしい共感できるものを考えながら「助けることは助かる」と言った中村さんの言葉に感動した。アフガンにある干ばつを知らなかった自分を恥ずかしく思います。意外だったのは、日本で考える距離感との違いでした。テレビの報道

が全てではないと今日の話聞いて思いました。ペシャワール会がこれからも活動を続けていって、1人でも多くの人間を笑顔に変えてください。そして僕自身も何ができるかを考えて自分ができる事は頑張ろうと思いました。中村さんは思った以上に普通の人です。だけど、「善悪のカテゴリーでは見ない」の言葉のように、人を助けたいという気持ちがペシャワール会まで至ったということはとてもすごい事だなあと思いました。僕は名桜大学のNという者です。今回のテロ事件の報復としてアメリカが攻撃をしたときに、すごいやるせなさを感じました。アメリカの基地がある沖縄、唯一の地上戦が行われた沖縄だからこそ平和を願う気持ちが強いのに、何もできずにいる自分に苛立ちを覚えました。僕は名桜で何人かの人と共に名桜大学でアフガンのテロ事件とアメリカの報復に対するアンケートを取りました。多くの人が戦争をやるべきではない、難民に対して物資を送るべきだという返答がありました。1人の沖縄人として、僕は平和が好きです。沖縄が好きです。人にはやさしくありたいと思います。今回の講演で多くの人に来てくれる事をうれしく思いました。僕にできる事を考えながら行動していきたいです。中村さんなら今の沖縄の状況にい

る1人の沖縄人ならどうするのだろうか？と考えながら。

N・Tさん 名護市在住

9. 中村哲先生の講演を心より拝聴したかったのですが、参加者の熱気に、立って聞くことは、身体的に無理ですので、残念ながら退席させていただきます。主催者の会場設定に、アフガニスタン難民、そして、県民への軽視が、今、会場にあると思います。

(記名なし)

10. 大変な感銘を受けました。所見に残った中で、疑問に思ったことを述べさせていただきます。国連や政府機関のおスミ付きを得た団体などは、組織が大きく折角の浄財が、組織の運営費、維持に大半は消失されていくということについてですが、それは、何故そのような事が起こるのでしょうか、単に人数が多くなると理解してよいのでしょうか。それとも、それらの団体は、的を得ているかわかりません。ある種の間違った情報、何がそうさせるのか理解できないフィルターのもとに、行動するから起こるのでしょうか？

Y・Eさん 那覇市在住

11. とても素晴らしい講演を聞けたと思います。私はTVでしか、アフガニスタンの状況、文化、風

習を見た事がありません。そのときの映像が、10人程度の住人が1人の住人に対して、石を投げつけるシーンだったので、私は「残酷な国だ」と思いました。でも、それは「アフガニスタンの現状を知らない外国人の言う言葉だ」と講演の中で中村さんが言っていたので、自分自身を恥ずかしく思いました。本当に無知な人間だと思いました。最後に、中村さんの話を聞いて、良かったと思います。アフガニスタンや、タリバン政権などの現状、新しい情報を生で聞いたことを嬉しく思います。それから、アフガニスタンの子供達の笑顔が、とてもいい笑顔でした。ああいう笑顔を絶やさないように、私もささやかながらですけど、募金を続けたいと思います。中村さん、これからも、医療活動を頑張ってください。本日は、ありがとうございました。

Y・Rさん

12. この時期に企画したのはとても良かったと思う。万一のことも考えて、段取りをキチンとしてほしかった。別教室のモニターを見てましたもので…。中村先生の話については、何を援助して何を自立させるか、今の沖縄の生きる方向性をしっかりと見るべきだと思った。そして、最後に話した、情報をいかに自分自身で正確に見極

めるべきかを痛感しました。

(記名なし)

13. タリバンについての認識が、大いなる誤解に基づいたニュース・ソースを通じてのみで把握してしまっていた事に気づいたのが大いなる収穫です。都市部と農村の大きな違い。日本列島の都市化で、御多分にもれず私自身も女性、子供に対する(悪行とされている)タリバンを嫌悪していたことを猛反省。日本のニュース・ソースについての報道の視点。西側の情報コントロールにより日本も洗脳されつつあった。出来るだけ状況を把握、判断できるように視野を広げる努力をしたいと考えています。ご多忙の折の来沖、心より感謝しています。御体くれぐれも御大切になさってください。

S・Hさん 那覇市在住

14. この講演会を聞きに行こうと思ったきっかけは、友達からの呼びかけで、その上、自分も将来は医者になりたいと思っていたので講師が医者の中村哲さんであるこの講演は、とても興味深く聞くことができました。アフガニスタンは、今、テロやら何やらでいろいろ騒がれているところで、映像でその現状を見たときは本当にショックでした。「ペシャワール会の振込み先が書いてあります」と言

った方がスマートだったかな、(でもこれは字が小さすぎます)本当に手弁当でお金をかけずありがとうございました。実行委員会の皆さんのおかげでこのような貴重なお話が聞けました。それで募金なんですけどペシャワール会の存在を知ってから、何度か振込みしています。今月もするつもりです。今日の感謝分も上乘せするつもりです。(なんかいばってるみたいで、いやなんだけど…)

Kさん 那覇市在住

15. TVなどの情報よりも現地の様子が良くわかった。あんな危険なところで…と、ビックリしたが、アフガニスタンの人々は外国人に対して敵意を持っているというわけではなく、必死で今日を生きている人々ばかりだったという事がわかった。困っている時(飢餓や水不足の時)には全然話題にも取り上げず助けられないのに、犯人がいる、というだけで国全体がアメリカに敵意を持っているとあおって、空爆する事をアピールする権利は、本当はなかったのではないかと思った。力の強い人に、一般の人は流されついていきがちだが、“本当にこの事は正しいのだろうか”と、皆一人一人が立ち止まって考えてみる必要があるなあ、と思った。

豊見城村在住 Mさん

16. 一言で言えば、聞きに来てよかったです。友人に誘われた時は、別にヒマだし行ってもいいかなあというぐらいの気持ちで、別に政治活動に興味もないしいいかげんなもんでした。中村先生の話はわかりやすく、とっつきやすくユーモアがあって、入りやすかったです。そしてやはりその土地で、活動をしている人の話しというのは説得力があると思います。こういう話というのは、なぜかマスコミでは取り上げられる事が少ないので、自分たち一人一人が広げていけたらいいと思います。大変よい講演でした。ありがとうございました。

那覇市在住 Nさん

17. アフガニスタンで実際にお働きの中村先生のお話が聞くことができ、改めて自分の中で気持ちが動かされました。平和を願う思いが、心の中から人へ、そして活動しようという力になった。与勝高校生のダンスや多数のボランティアの方。皆さん考えて行動している。何かしようというものが生まれました。このような講演会をありがとうございました。

(記名なし)

18. 米国のアフガンへの空爆が連日繰り返されるたびに過去に地上戦を経験し、そして今日まで極東

最大の米軍基地があることで間接的ながら殺戮の加害者となる沖縄に悲しく感じました。中村先生はアフガニスタンで17年も医療活動を続けてきたことは私達、沖縄に住むものに勇気と力を与えてくれるものでした。私達沖縄は、世界各国への空爆発信地沖縄にならないように、一日も早く、沖縄から一切の基地がなくなる事に力を尽くしていきたいと思います。中村哲先生、今日は遠くアフガニスタンから、沖縄に足を運んでいただき有難うございました。またぜひ、いつか沖縄にいらして、貴重なお話を聞かせて下さい。アフガニスタンのみなさんや、ペシャワールスタッフのみなさんにも、沖縄は応援しているとお伝え下さい。

沖縄市在住 Tさん

19. 中村さんにお会いしてお話が伺えると嬉しかったです。ありがとうございます！

那覇市在住 Tさん

20. どうもありがとうございました。私達は日本でがんばります。

大宜味村在住 Fさん

21. テレビを見る、新聞を読む、インターネットを見る。それだけでは得られなかった情報を聞いて、非常によかったです。知らなかった事が多く、とても興味深

く聞かせていただきました。私達は学校のクラブでアフガニスタン難民の支援活動を開始しました。その中で私達は、アフガニスタンの現状について、歴史背景などについての学習をしています。その学習にも、これからの活動にも、先生の講演を聞いた事を活かしていきたいと思います。また、情報を公平に判断するよう心がけたいと思います。これからの活動、がんばってください。

那覇市在住 Yさん

22. 「正義の戦争というものはない」と言うのが本当にそうだと思う。「ならず者国家」というブッシュの発言からもうかがえるように、アフガンをはじめ、アメリカのイスラム国家に対する仕打ちが報復テロという事態を招いたのだと思う。今度の戦争でテロがなくなるのだろうか。むしろ、テロが繰返される種をさらにまいたと思う。医師という立場で、アフガンの人々の生命を救う活動を17年間も続けておられる事、本当に素晴らしいと思います。一人の人間の考えや生き方が多くの人々の心を動かすものだと思います。どうぞお元気で、より永く、アフガンの人々のために活動を続けてください。

(記名なし)

23. 会場である601号室に入って驚いた、関心の高さに。そして若い高校生等が我が身のこととして真剣に行動しているのはうれしかった。人助けをする事はまず自分の体力が強健でなければならぬと痛感する。信念を持ってやれば、どここの現地の人にもとけ込めるんですね。アフガニスタンの人々と沖縄人との共通する点が多いと感じた。

(記名なし)

24. 先生の情熱には、頭が下がります。そして、とても強く心魅かれ深く共感できた言葉「助ける事は、助かる事」です。沖縄に生まれ育ち、ここから日本の中央の政治や日本の考えを見ていていつも歯がゆく思い苛立ちを感じそれが日本人はいやだなあと不信感が強くなっています。(もちろん市民運動などで沢山ががんばっている人たちもいる事を承知しつつも)でも、皮肉にもアメリカのアフガン攻撃によってペシャワール会の存在を知り、「ニュース23」で先生のお話に触れ、一つの希望が見えた気がして嬉しく思いました。へこたれず自分ができる事を積極的に行動していこうと思います。今日は本当に貴重なお話ありがとうございました。どうぞ健康に留意なさって、これからも、私達にも元気を下さい。

北中城村在住 Hさん

25. もう持つことをやめようか
くならう本当にそう思う

(記名なし)

26. 私達は、何も知らなすぎると
思いました。私達日本人は豊かな
国の情報しか知らない、本当の事
がわかってないというか。募金さ
えすればいいという考えを考え直
さなければならぬですね。
また、私達は「貧しい国の人々＝
かわいそうな人」と思いがちな部
分が多いですね。よくボランティア
活動をなさっている方は、
「私自身も助けられてる」と語っ
ていますよね。そういう事を聞いたり
すると、私達が逆に貧しくてか
わいそうな人に思えてくるんです
よ。イマイチまとめられないんで
すが、私の感想です。お話ありが
とうございました。

(記名なし)

27. 思想的な事、政治的な事はさ
ておき、とにかく目の前にいる人
達の診察をするのみ、それは生き
ること、生きているだけでいいと
いう事が、まず人間にとって一番
大切なのかなあと感じました。情
報があふれる中、本当のことが知
りたいです。アフガニスタンの大
干ばつについては知らなくて恥ず
かしい思いです。何が必要か不必

要なのか見極める事はとても大切
だと思いました。

豊見城村在住 Rさん

28. 私も去年から、NGO に対す
る勉強をしていて、ある沖縄の
NGO 団体で勉強させてもらって
います。去年から、アフガニスタ
ンがアメリカから攻撃を受け残念
に思いました。去年モンゴルに行
き日本で受ける情報と、現地の本
当の情報に温度差があることを体
感しました。そして、先生おっし
ゃっていた、「助ける事は、助けら
れる事」という言葉は、私も本
当にそう思います。私も、これか
ら沖縄県のNGO活動が活発化し
ていけば、関係のない人達からの誹
謗中傷を受ける事が少なくなるの
ではないかな?と思います。先生、
がんばってください。私もがんば
ります。

(記名なし)

29. 中村 哲さんは、現地での経
験をもとにアフガンの現状を語っ
てくれたので、非常にわかりやす
かったです。今回の戦争から援助
までの世界の動きを見て考えた事
は、人間の本质と技術は、バラン
スよくもっていないといけな
いと感じました。心をおろそかにし、
技術ばかり磨いていると、自分
を守るために他の考えを排除する
気持ちができってしまう。しかし、
心だけを大切に、といっても現実と

して、それだけでは生きていけない、衣服、水、電気が必要である。だから、このバランスを作っていく事が、いい事だと思いました。

(記名なし)

30. 昨年のニューヨークテロ事件
その後の米国の報復攻撃でアフガニスタンに世界の注目が集まったが、実はその二十年前からアフガンで医療活動が続いている方がいるのを初めて知った。その事件の効果として、中村先生のベシャワール会の存在がマスコミその他を通じて、日本国民に知らされたのは事件の副作用として日本人にアフガンの情報を知る結果になったのではないか。今回の事件でアフガンがマスコミに取り上げられる以前に、アフガンの医療衛生、教育等、二十年近く戦争に巻き込まれたために貧困の問題が解決のほうが大きき解決すべきこと、ということが先生の講演で勉強になった。ベシャワール会の現地に密着した、息の長い活動に感激し、何か協力できる事がないか、今後も考えていきたい。

那覇市在住 Tさん

31. 助ける事は、助けられる事だという言葉が大変心に残りました。物質的豊かさが、精神的豊かさを即、約束するわけではないということが。スライド最後の写真にあ

るこどもたちの笑顔が、象徴するものだと感じました。また、西洋が国連などの動きを牽引しているというか国際社会の中心、表舞台に立っており、西洋文明、西欧、米国のあり方が全ての上流であり素晴らしいという思想の奇妙さがつくづく露呈されているものだと思います。何が正義で、何が悪かというのは、一概には決められないけど、少なくともキリスト教を掲げるヨーロッパ人や米国人がなぜ爆撃を止められないのか。“右の頬をたたかれたら、左の頬を出しなさい”“上着をとられたら、下着をも差し出しなさい”“隣人を愛しなさい”と愛を掲げているのに、どうしてかなと思います。結局、戦争をする事により、傷つくのは弱い立場の人で、潤うのは金がある人なのだなー、と。で金があるのは金を流通の基礎に置く、いわゆる先進国で、先進国とは歴史的に植民地支配を行ってきたキリスト教文明。私はキリスト教を批判するつもりはまったくないけれども、宗教があまりにも日常生活からかけ離れているものだ、と。宗教というのは、そもそも必要性があって生じてきたもので、生活に根付いていたはずではないでしょうか。時代の変遷とともに、宗教が現実にとぐわなくなる事は致し方ないのですが、“愛せよ”と悟らされているのに、わざわざ憎し

みを増長させているのは、淋しいと痛感します。いまだに、アメリカ人のかなりの率が原爆は、戦争終結の有効な武器と信じているという調査もあり、情報のあり方の恐ろしさを感じました。

文明間の対話などと声高に叫ばれているけど、文明の押し付け合いにならないように注意していかないといけないと思いました。

(記名なし)

32. テロが起こったことで、授業でアフガニスタン調べの機会がありました。アフガンが今まで何度も戦争に巻き込まれてきた事、アメリカの一方的、宗教干渉などニュースや新聞では報道されないことも知り、一番の被害者はアフガンの一般市民だと知りました。中村先生の話聞いて、アフガンの人々の生活や日本で報道されているニュースの誤りを知る事ができてよかったです。どうもありがとうございました。

糸満市在住 Aさん

33. 自分の知らない事が多かった。アフガニスタンの現状と、私が新聞やTVで見るアフガニスタンについての情報に大きな違いがあった。より正確な情報を得るためには、自分で動いていくしかないのだ。情報を自分で選択するという意味で、自分の情報にも自己責任

が問われてくる時代が今だと思う。アフガニスタンの事に限らず、日本国内の政治・経済・国際関係・教育・福祉についての情報が錯乱する中で、自分が主体的にそれらの情報に関わっていく事を大切にしたい。

糸満市在住 Yさん

34. 琉大医学部で学んでいるものです。テロの起こる前と後とで世界は何が変わったのか。情報化社会とはどのようなものなのか。

(記名なし)

35. メディアから得られる情報しか知らなかったのが、今日の講演はアフガニスタンを知るとても良い機会となりました。自分で知る努力、正しい知識を得る努力をしていかないと、本当の意味での理解は生まれません。今日、アフガニスタンの惨劇をうかがって、微力ながら、自分にできる事はないかと思いました。

与那原町在住 Cさん

36. 素晴らしい内容でした。知らないということは罪な事だと思いました。自分とは関係のない遠い国の出来事としてではなく、地球に生きる同じ人間として、世界の人たちが協力し合っていかなければいけないと思いました。自然災害という人の力だけではどうにも

ならない環境の中であんなに沢山の
人たちが必死に生きている。一方
で、平和ボケしてしまった日本。
戦争体験の生き残りがいる中でま
た、戦争への道を進もうとしてい
る事に関心を払わなくなった私達。
もっと世界の事に目を向けて、今、
何が必要で、やるべき事が何なの
か知ることから始まると思いまし
た。テレビの情報からしか知ること
ができず、それが全て正しく正確な
事実だと思いこんでいました。怖
い事ですね。だからこそ、このよ
うな機会がとても重要だと思いま
す。素晴らしい企画に感謝です!!
一回限りではなく、その後の活動
についてもまた私達が参加できる
形で講演会を開催していただきたい
と思います。中村先生、これからも
どうぞ、お体に気をつけて。また
私達の知らない大切な事を伝えて
ください。今日は本当にありがとうございました。

(記名なし)

37. 実際にアフガニスタンに住んだ
ことのある人の話を聞いて良かった
と思う。テレビでは、あまり放送
しないような、干ばつで苦しい生
活をしていた事などの話を聞いて、
大変なところもあるなと思った
けれど、子供達の笑顔の写真を
見て、何か少しほっとするもの
を感じた。また、アフガニスタン
の人のほとんどはタリバンを悪く

は思っていなかったというのは意
外だった。この講演に参加して良
かった。

那覇市在住 Kさん

38. 私はこの講演会に参加するか
否か、非常に迷った。なぜなら、
三時間に及ぶ講演会に参加する
という機会はほとんどなく、最後
まで集中できるかどうか心配であ
ったからである。しかしとりあえ
ず最後まで聞く事ができたので、
良かったと思っている。アフガ
ンの現状を撮った写真やビデオは
TV ニュースで見た事があるのでさ
ほどの関心は湧かなかつたが、一
番驚いたのは、アフガンの人々が
外国人をほとんど知らないという
ことであった。西洋人と東洋人の
区別もつかないということは、と
ても情報の行き届いていない国
であるという事である。これは戦
争が、もしくはその国の政治など
がもたらした結果であるのか? 非
常に驚いた。私としては、中村先
生にアメリカに対しビン・ラディ
ンが行ったテロ行為とその被害者
の皆さんに対しての感想、話しも
講演中に述べてほしかったが、
それが聞けなかったのが少し心残
りでもある。そしてもう一つ、今
回この会場にいらしたお客さん
達は、アフガンについての話を
聞き、アフガンについての話し
だけを連想したのであろう。私
が不思議に思う点は

その点で、つまり今回のお客さん達はアメリカの受けた被害について考えた人はおられるだろうか？要するに、タリバンがかくまったビン・ラディンのテロ行為についてである。私はそのテロで犠牲になった人々の事を講演中に触れるべきだったのではないだろうか？と私は思う。

在学学生 Kさん

39. 直接お話が聞け、現場の状況を理解すると共に、私の理解の誤解に気付かされました。テレビ等のマスコミで報道されたままを受け入れていましたが、実際には全てそうではない事に気付かされた事が、一番嬉しいです。私は、アフガンに対して悪いイメージ、そして悪いようにしか思っていないでした。しかし中村先生の話を知っていると、そうではないこと、逆に「私はアフガンの人は良い人と思っているほどだ」という言葉に私の気持ちも少し動かされたように感じます。先生の人柄、情の厚さを直接感じる事が出来、とても嬉しかったです。多くの事、そして心打たれた事を得た講演になりました。本当にありがとうございました。又お会いできるといいなと強く願っております。

(記名なし)

40. アフガニスタンという国につ

いては10数年前からよく耳にしていますがそれは対・ソビエト軍との戦争であり、当時は東西の冷戦、あるいは代理戦争という感じがしてました。私達にとっては遠い国の出来事でした。2001年の秋以来、とてもいろいろな情報が飛び込んできました。よく知らない国、よく知らないイスラム教、少し奇意に写る女性の姿、メディアの言葉のみが耳に入ります。今回中村さんの現地の生活を通しての言葉はとても存在感があり、初めて知る人々の生活、習慣等、知る事の大切さを学ばせていただきました。これから私達一人一人に何が出来るかを考えていきたいと思えます。

西原町在住 Mさん

41. テレビやラジオのニュースで報道されている場所は、ほんの一部なんだと感じた。また、アフガンの人たちに対しての自分の考え方があまりにも客観的だった。自分達の見えていない、わからない場所での活動が「こんなにもすごいんだ」と感心させられ、私達のJRC(青年赤十字)での活動にさらなるやる気を覚えた。テロの影響はまさに世界的なマイナスである。この講演にくることができ、聞くことができたことを本当に感謝します。

那覇市在住 高校生Yさん

42. 障害児学校に勤めているので、自分のもてる力をさらに伸ばそうと努力している子に囲まれています。これまで、障害者に対する理解のなさに「もっとみんなにわかってほしい」と思っていましたし、現在も思っています。さて、自分は他の国を正しく理解しているのかという疑問です。ベトナムの事、フィリピンの事、そしてアフガニスタンの事、日本人が個人で支援している事を最近知りました。私自身は健康、経済面に何の不安もなく暮らしています。今後は、さまざまな形で、困っている人を支援している方にささやかながら協力していきたいと思っています。沖縄で直接講演を聞いたことに感謝します。

糸満市在住 Fさん

43. 私は、本土から（東京から）沖縄に移住して早や三年になります。本土にいたときには肌で、耳で感じ取る事ができなかった米軍基地による爆音、犯罪について考えさせられる事ばかりの毎日です。沖縄にきた以上、沖縄の人たちと一緒に米軍基地の完全撤収に向けて戦いたいと思っているのですが、私が想像したよりもこの島の人々は基地をいやがってないじゃん！なんだかあきらめの境地のようで拍子抜けしてしまいました。が！今日中村先生のお話を聞いて、とても励まされた思いです。

私ももう一度、本当に小さなことからこの島でがんばろうと思いました。今回の米国による一方的な報復攻撃には、腹が立ちます。簡単に米国にくっついて走り出してしまった日本にも。2001年9月11日以降、本当に沖縄の基地は「戦場って、こんな感じなのか？」と思えるような状態でした。（うちは普天間基地のすぐ近所です）。ジェット戦闘機の爆音、戦闘ヘリが夜中近くまで飛びまわるなんて、それについて文句を言う場所がないなんて！新しい基地は絶対に造らせないようにしたいです。毎日、うるさくて頭が割れそうな普天間基地ですが、辺野古の海は守りたいです！私はマスコミの流す映像やニュースはうのみにしません。米国に操作されているような情報が多いような気がするからです。日本のジャーナリズムって、死んだんでしょうかねえ。もともとなかったのか。

宜野湾市在住 Tさん

44. 講演を聞いて、テレビで報道されているアフガニスタン情勢と実際の情勢はずいぶん異なっていると思いました。テレビでは、「タリバンは悪」という感じで報道されていて、私もそう思っていました。しかし、タリバン政権は必ずしも悪い政権ではなく、秩序が

保たれた政権だったという事がわかりました。現地に行ってみないと本当の事はわからないなと思いました。アメリカは、アフガニスタンに空爆する事が正しい選択だったとは思いません。アフガニスタンの基地を攻撃すると言っていました。誤爆などもあり、一般市民も多く亡くなってしまいました。先生が言っていたように、食料がなく困っている人たちが人口のほとんどを占めている事を知っていたら、アメリカは攻撃しなかったのかもしれない。安全とは決して言いきれないアフガニスタンで地域に根づいた協力をしている先生はすごいなと思います。「助ける事は、助かる事だ」という言葉が印象に残りました。

(記名なし)

45. テレビで流れてくる情報では、アメリカが悲劇のヒロインの役をしているような気がしていました。(アフガニスタンが悪者となっている気がしました) 私達は、知らない国よりも知っている国に共感を持ってしまいがちで、タリバンが犯したテロの背景を知らずタリバン、アフガニスタンが悪者となってしまふ。私達はもっと背景を知った上で、テレビなどの情報を入れるべきだなあ、と思いました。中村先生の話聞いて、アフガニスタンで生きている人達の素晴ら

しさを知ることができました。率直に私の意見を書きますと、湾岸戦争の事は、もう過去の事となっていて、何でまだ根に持ってしまうのかと疑問に思いました。でも、よくよく考えてみると、テロ事件が起きるように仕向けたのはアメリカ自身だったような気がします。私は、ボランティアに興味があり、高校でも地域国際クラブに所属していますが、クラブの中で、アフガニスタンについて考えています。今年の四月から大学生となります。ゆくゆく将来は、ボランティア関係の仕事につきたいと思っています。中村先生は医者という職で現地とフィットしている事に感銘を受けました。最後に、「助ける事は助けられる事」という言葉を聞いたことでも、今回の講演会に来てよかったと思いました。日本のテレビ情報では公平に物事を見極めるのが難しいというのが残念で、早くアメリカの攻撃が早く終わってアフガニスタンに少しでも早く落ち着いた生活を取り戻せるといいなと思います。

那覇市在住 Mさん

46. 今日はこの講演会を企画してくださった皆様、そして遠く沖縄まで足を運んでいただいた中村先生ありがとうございます。中村先生の講義を聞いて、「本当の豊かさ」、人と人とが幸せにな

るという事は何か、相手を尊重する事、「和」を持っていきる事を考えさせられました。私も普段の生活の中で、私に何ができるかを、改めて考えてみようと思います。それから与勝高校の皆さん、そして会場に来ていた多くの若い人達、平和について今学んでいる事、感じている事、この気持ちをずっと社会に出て大人になっても忘れずに持ち続けて行ってほしいと思います。一人でも多くの方が「平和」を願う心が増えればそれは必ず形となっていくものだと思います。「他の人を思いやる心」をいるまでも忘れずに私も改めてそうなんだと確認させてもらえました。ありがとうございます。

那覇市在住 Rさん

47. 医療、水、食料の確保を地元
の文化、風習をできる限り理解しながら、「人の行きたがらないところに行く、人がやりたがらない事をやる」の方針で活動をしているベシャワール会の活動を素晴らしいと思います。アフガニスタンは「珊瑚の塊」のようなもので地域、地域が一つの単位で、生きている。地域を統括するのはイスラム寺院と長老会であり、自分達の利益から判断し行動する。アフガニスタンの9割の人々がタリバン政権を積極的に受け入れている。タリバン政権は今まで出現した政

権で最も清潔であるとの話が聞けて、よかったと思います。「明日は病気で死ぬかもしれない子供達が明るい」、「アフガニスタンを見る事は、我々の足元を見る事だ」が強い印象で残っています。中村哲講演会実行委員の皆さんに敬意を表します。

北中城村 Kさん

48. 今回のアメリカのアフガニスタンへの攻撃に、どこか、戦略的な意図を感じていた一人として、中村先生の講演は、実に愉快でした。同じ日本でも、同じ沖縄でも、米軍基地を身近に感じていない人にとっては、今回のテロによる影響は、単なる経済的な事に終始しそうですが、これからの私達の生活や、地球全体について、足元から考える機会となる講演でした。「持てる者程、暗い顔をしている」「助けているつもりで、実は助けられているのかも」という言葉には、深いものがあり、笑いながらグサリとくる感情がありました。アフガニスタンで、日本人が好かれている、知られているという事実は、驚きでしたが、胸が熱くなりました。彼らの思いをこれからの私達が裏切る事がないよう、努力していこうと思いました。土や水や太陽と共に生きている実感が薄い都会に住む私達は、さまざまな消費財に囲まれて生きている分、

生きている幸せを感じないのかも
しれません。何もないところから、
自分の力で立ちあがれるアフガン
の人々は幸せであり、そのような
人々と共に、生きている沢山の
人々がいる世界は、案外、明るい
未来があるのかも。与勝高校の皆
さんの力を信じたいと思っている。

那覇市在住 Iさん

49. 今日の講演会は本土だけでな
く、危険かもしれませんがアメリカ
でも行うべきだと思います。「正義」
の戦争と称してアフガンの無差別
爆撃を行う米軍の目を覚まさせる
ためにも！何より大切なのは「武
力による統制」ではないと思いま
す。この講演会を聞いて、アフガ
ニスタンの貧しい現状やそれに対
して我々日本人がどうするべきか
についても考えさせられました。色
々と言いたいことはありますがあ
えて略させていただきます。講演
お疲れ様でした！

那覇市在住 Kさん

50. 今回、中村先生の講演会を聞
いて、自分自身が変わった気がし
ました。はっきり言って、実は今
まで、ボランティアに関してあまり
興味がありませんでした。世界規
模のボランティア団体が、募金の
半分以上を組織維持に使っていると
前に聞いたことがあり、それから、
ボランティアに対して不信

感を抱いていました。しかし、こ
の講演で、ペシャワール会という
難民、貧困のためにすばらしい活
動をしている、組織があるという
ことを知り、いままでの考えが変
まりました。私にはカンパという、
ほんの少ししか協力できないけど、
このほんの少しがアフガンの人々
に役立ってくれば幸いです。

(記名なし)

51. 今日、中村先生の講演を聞い
て、私たちは、テレビマスコミな
どからしか、現地の状況、を知る
ことができない。実際、話を聞き、
私たちが想像している以上に、ア
フガニスタンという国は厳しい現
状だということを知らされた。そ
して、現地の人は、まともな医療
を受けられない。豊かなものは生
き残り、貧しいものは死ぬという
のはなんともいえない悲しい現状
である。豊かな国、いわゆる発展
国、お金持ち、地位、権力を持つ
ている人が、まともな、それ以上
の医療を受けられ、貧しいものは
受けられないという考えは取り去
るべきだと思った。強者より、弱
者を助けるということに奉仕すべ
きだとも思った。

(記名なし)

52. ペシャワール会のホームページ
で、この講演を知りました。ペ
シャワール会の会員なのでペシャ
ワール会の取り組みは追っていま

したが、沖縄大学がこのような催しを行うことや与勝高校の生徒さんのすばらしいアイデアと実行については知りませんでした。沖縄にもさまざまな人がいることを知り心強く思いました。中村先生の話は、こんなの不謹慎かもしれませんが大変面白く、元気をもらって帰ります。いくつもの言葉をはんすうしてみたいと思います。最後に、この講演会の段取りが参加者の一人としてとってもよかったなと思います。これだけの多くの人が集まったのに、スムーズに楽しく進行して言って、すごいなと思いました。スタッフの皆様お疲れ様でした。

S・Kさん 那覇市在住

53. こういう活動に参加したいと思っているのですが、自分の能力に見合った仕事がないか探しています。

N・Mさん 那覇市在住

54. ペシャワール会の活動のVTRを見て、日本人たちで、こんなにいい活動をしている人たちがいるのだな、と、とてもうれしくなりました。私もこういう活動をしたいと思いました。ペシャワール会の方々のような活動があるのに日本というひとつの反応としては、まったく反対のことしか表せていない。とても悲しく思います。

学生 M・Fさん 那覇市在住

55. アフガニスタンの人々を日本につれてきて、子供とかに、日本の栄養那物を食べさせて、元気にさせてから、アフガニスタンに返すことはできないのですか？（募金で、足りないものとかを・・・）今の戦争を世界（アメリカ以外）で止めることはできないの？今日は本当によかったです。勉強になりました。

学生 U・Mさん 具志川市在住

56. 募金箱とか、たくさん作ってから、洋服とか、他にいろんなものを、まだ使えそうなものを作って、アフガニスタンに送ることは、できないのだろうか？

学生 U・Sさん 具志川市在住

57. 今日、この講演を聞いて、本当によかった思いました。テレビとかでは、ほとんど、アメリカのことばかりで、アフガニスタンのことも、もちろんやっているけど、こんなに細かくはやっていませんでした。だから今、どんな状況か、それから、そこに住んでいる人たちの話や、映像を見れてよかったです。思ったことは、最後の写真で子供たちが、笑顔で笑っているのを見て、こんなに苦しい思いしているのに、何で笑顔でいられるのかなと思いました。もっと私たちにできることをしたいです。

学生 S・T 具志川市在住



中村 哲講演「アフガン17年と私の提言」収録集

2002年1月19日（土）

沖縄大学 I号館（6階）601号室・5階教室

主催：中村哲沖縄講演会開催実行委員会

構成団体：沖大地域研究所平和自立政策研究班、沖縄県高教組、
沖教組、県職労、沖縄から基地をなくし世界の平和
を求める市民連絡会、アフガンを知りたい実行委員会、
沖縄県高校生交流集会、中村哲講演会を実現したい
沖大有志の会

発行 2002年4月23日

編集 沖縄県教育文化資料センター